

# 「第23回 全体会」

日時 2017年12月11日(月) 15:00～

会場 ホテル沼津キャッスル 1階ロイヤルホール

**落語&トークショー** 三遊亭朝橘さん(沼津市出身)  
聞き手 SBSアナウンサー 水野涼子

## サンフロント21 懇話会 第23回 全体会

静岡新聞 SBS



2017年12月、サンフロント21懇話会2017年度全体会が開催された。沼津市出身で真打に昇進した落語家三遊亭朝橘師匠の古典落語「茶の湯」に聴き入り、続くトークショーでは朝橘師匠の落語の世界の興味深い裏話を楽しんだ。終了後は朝橘師匠を交えた懇親会で一年の労をねぎらった。

## 主 催 者 代 表 挨拶

静岡新聞社 社長

大 石 剛



みなさまこんにちは。本日は年末のご多忙の中、サンフロント21懇話会2017年度全体会にこのように多くの皆さまにご来場いただきまして、誠にありがとうございます。

早いもので2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催まで3年を切るというところに入っております。ご承知の通り伊豆市では自転車競技が開催されます。国内外に伊豆の魅力を発信する絶好の機会であり、当懇話会としても県東部地域・伊豆地域が自転車愛好者の聖地として発展していくために幅広い事業に取り組んでいきたいと思っております。

懇話会ではサッカーJ3のアスクラロ沼津の支援も掲げております。アスクラロ沼津は2017年シーズン、優勝争いを最後まで繰り広げ、最終的には3位でリーグを終了いたしました。スタジアムの改修を行い、来シーズンにはJ2への昇格を果たし、遠くない将来、J1の舞台で活躍してほしいと思っております。

また本日ゲストにお招きした三遊亭朝橘さんはご当地沼津の第五小学校と第五中学校をご卒業されました。今年真打にご昇進されたということで、最近ではSBSテレビでもコーナーをお持ちになり、テレビでも拝見することが多くなっております。地元出身の落語家として、本懇話会としてもぜひ応援をしていきたいと思っております。今日は講座だけでなくその後のトークショーにもご登場いただけるということで、落語界の興味深いお話が聴けるものと楽しみにしております。

最後になりましたが今年懇話会は23年目の活動を迎えました。これもひとえに皆さまのご支援ご協力の賜物と思っております。心より感謝を申し上げ、主催者の挨拶とさせていただきます。本日はご来場誠にありがとうございました。

## 懇 話 会 代 表 挨拶

サンフロント21懇話会運営委員長(伊東法律事務所所長)

伊 東 哲 夫



本日は全体会によろこそお越しいただきました。日頃サンフロント21懇話会の活動にご支援ご協力をいただいておりますこと、この場をお借りし厚く御礼申し上げます。

本年度も5月の総会、9月の伊豆地区分科会、11月の東部地区分科会を無事終わり、本日、全体会の運びとなりました。分科会も残すところ、来年3月に開かれます富士山地区分科会を最後に本年度の活動も終わりとなります。この会議の後、先ほど大石社長から話がありましたように、今年の憂さを笑いで吹き飛ばして、来年がより良い年になりますようお願いしまして、沼津出身の真打・落語家の三遊亭朝橘師匠をお招きしております。どうぞ皆さまお楽しみください。

さてこの全体会の前に運営委員会を開催し、これまでの活動報告と次年度に向けた活動案を討議してまいりました。これにつきましては来年の総会で正式にご提案し、皆さまの承認を得るところであります。その中で活動計画について1～2点頭出しをしておきたいと思っております。

まず1点目は日本遺産の申請。これまで文豪と老舗旅館という切り口で準備しておりましたが、文化庁に内々に具申してみると、文豪と温泉というのは伊豆に限らず、有馬温泉も城崎温泉も湯河原温泉も該当し、伊豆のオンリーワンではないと指摘され、このまま申請しても良い結果が得られないのでは、ということになりました。

伊豆のワサビはまさに伊豆のオンリーワンのものです。ワサビが伊豆に来た由来から歴史をたどり、現在、そして伊豆の未来を、ワサビを中心にストーリー化したらどうかと考え、現在、運営委員会できりまとめているところでございます。

ご存知の方もいらっしゃると思いますが、山葵という字は徳川家の葵の紋から来ております。それが天領となって脈々と日本一の生産地として今日に至っております。ワサビを巡る食文化、神社の創設や水の由来などワサビには伊豆の魅力をアピールするものがたくさんあると、改めて認識させられたところでもあります。

もう1点は、この10月に県知事と沼津市長に提案しました原・浮島地区のまちづくり構想です。サンフロント21懇話会の次年度の目玉の活動として推進していこうと考えております。仮にJRの鉄道高架が出来たとしても、鉄道が上を通るだけでは原・浮島地区のまちづくりには結びつきにくい。そこで、JRを含め、一気に原・浮島地区を変えていこうというものです。

主には3つの地区—①サッカースタジアムを中心としたスポーツエリア、②愛鷹山中で進めるAOIパークを中心とした農業のイノベーションエリアとこの地区の農産物を守る道の駅。③白隠禅師ゆかりの地を中心とした文化エリア。この3つを基軸にまちを作り直し、東部の活性化をはかっていこうというのがサンフロント21懇話会の運営委員会とTESSが考えている構想であります。正式に活動案としてご提案申し上げました際には、皆さま方の絶大なご支援ご協力をお願いするところであります。

本日この後、落語と懇親会とお楽しみがありますので、ぜひ最後までおつきあいいただければ幸いです。

## 第23回全体会トークショー

# 落語に触れる すそ野を 広げたい

落語 演目「茶の湯」  
三遊亭朝橘氏



ゲスト・  
落語家  
三遊亭朝橘氏



聞き手・  
SBSアナウンサー  
水野涼子氏

(水野) ここから三遊亭朝橘さんに落語のあれこれをトークショー形式でうかがっていきたいと思います。朝橘師匠は燦々ぬまづ大使になられ、サンフロント21懇話会の舞台を踏むのを楽しみにされていたとうかがっております。

朝橘師匠は声の大きさも落語界では有名だそうです。今日も会場に入るなりマイクの音量調節なども行っておられました。本当にアナウンサーから見てもいいお声だなあと羨ましく思っております。今日の落語の演目は？

(朝橘) 茶の湯というお話でございます。純粋な江戸落語で私の師匠直伝のお話です。

(MC) 本当に扇子と手ぬぐいを巧みに使い分けてお抹茶を点でていらっしゃいましたね。

(朝橘) 絵にかいたような落語の寸評ありがとうございます(笑)。

(水野) いやいや(笑)、横で拝見していて、本当に所作が素晴らしいと思いました。

(朝橘) 師匠はものすごく厳しかったですからね。私の師匠は三遊亭圓橘と申しまして6代目の名跡を継いだものです。先代の三遊亭圓楽の3番弟子でして、もとは別の師匠についていたのですが、その師匠が亡くなって圓楽門下に移籍して、私は先代圓楽からしたら孫弟子にあたるわけです。

先代圓樂の師匠に三遊亭圓生という昭和の落語のお手本のような素晴らしい師匠がいらっしゃいました。私の師匠は圓生師匠がものすごく好きで神様のように尊敬しておりました。三遊亭にとって圓生という名は宗家のような存在で、誰も継いではいない偉大な名跡です。その圓生師匠から、うちの師匠がたった2席だけ、1対1で稽古をつけてもらったうちの1つが、この『茶の湯』です。

私も圓生師匠の落語を聴いて落語家になろうと思いました。うちの師匠を通じて圓生師匠を教わることができた大事なネタであり、ご当地縁のお茶の話、ということで本日ご披露させていただきました。

**(水野)** それでは三遊亭朝橋さんについて伺っていきたくと思います。沼津市のご出身、しかもここキャッスルホテルのすぐお近くのお生まれだそうですね。

**(朝橋)** そうです。税務署の向かいにうちがありましたからね。学園通りの裏の杉崎町で、地元も地元です。今日も久しぶりに第五小学校の前を通ってきましたが、ちょうど五小のグラウンドの向こうに富士山が見えて写真を撮っちゃいました。

**(水野)** 沼津市では初めて落語家になったということですが。

**(朝橋)** 初めてといたしますか、昔、沼津の正蔵と言われた人がいたそうで、その方のお墓もあるそうですが、現役の落語家で沼津市出身は私しかおりません。「私しか」と強調するのは「私の目の黒いうちは沼津からは出さねえぞ」という意味なんです（笑）。

**(水野)** 私も沼津出身ですが、沼津ですと落語家になろうというきっかけが少ないように思います。小さい頃に落語に触れる機会はおありでしたか？

**(朝橋)** ないです。落語に触れたのは24歳の時です。

**(水野)** 筑波大学ご卒業とプロフィールにありましたが、では大学卒業の時点ではまだ……。

**(朝橋)** まったくありません。大学にいたころはクラシックギターをやっていました。専攻は人文地理学でしたが落研ともまったく関わりなく、第一、落研というのは着物を着てモテたいと思っている奴らだと思ってましたから（笑）、まさか自分が着物を着るはめになるとは思いもしませんでした。

**(水野)** 筑波大学でクラシックギターを弾いて、卒業後は就職され……？

**(朝橋)** そんな恐々聞かなくても（笑）……まあ2年ぐらいプラプラしておりまして、24歳のときに沼津に戻ってきて初めて落語に触れたのです。3歳下の弟がちょうど大学4年生で日本文学を専攻していて、卒論のテーマに落語を取り上げるといので、一緒に調べたんです。弟が知っていることを兄の僕が知らないのは悔しいですからね。そういう張り合いを兄弟でしていたんです。で、市立図書館かどこかで調べていて偶然聴いたのが圓生師匠のCDでした。それに感動したんです。

**(水野)** 弟子入りするのに大変ではありませんでしたか？

**(朝橋)** 大変でしたよ、丸一年採ってもらえませんでした。

**(水野)** 師匠の家に通い詰めて玄関の前で待っているとか？

**(朝橋)** そこまでしませんでした。圓生師匠のCDに感動してから東京の寄席に行くようになり、圓生師匠の流派に弟子入りしたいと思っていたので、圓生師匠の一番弟子である先代圓樂師匠の系統を探して行きました。

三遊亭圓朝という人が作った『牡丹灯籠』という大作落語があるんですが、幽霊がカランコロンの下駄を鳴らしてやってくるという話で、日本の幽霊は足がないのに下駄の音を響かせてやってくるという有名なシーンがあります。それをCDで聴いて、こういう落語をやっている人の弟子になりたいと思って調べたら、私の今の師匠の圓橋が圓朝師匠の落語をライブワークにしていると知って、最初は師匠が所属している事務所へ手紙と履歴書を送りました。そしたら「大学まで出てやることないだろう」と断られ、「私の落語がお気に召したのなら、これこれこういう落語会がありますよ」と宣伝されたんです。ようは弟子ではなく客にしようとしたんですね（笑）。冗談じゃねえ、誰が客になるもんかと思ってもう一度手紙を出したんです。

一度目の手紙の返信に、師匠の自宅の住所が書いてあったので自宅へ手紙を出してまた断られました。返事も来なくて無視されたと思ったので、地図で自宅を調べて直接乗り込みました。2003年12月23日雨の日のことです。会ってはもらえ

たんですが、アポ無しで来るなどすごく怒られまして、そこから1年ずっと師匠が東京でやる独演会に毎月沼津から通い詰め、沼津でバイトをしてお金を貯めて東京に出るための資金を稼ぎ、10カ月ぐらい経ったところで師匠から「親を連れてこい」と言われてお許しをいただきました。最初に手紙を書いてから丸1年かかりました。

(水野) ご両親の説得は大丈夫だったんですか？

(朝橋) それは騙し騙しのミステリーツアーで(笑)。

(水野) 入門して前座から真打まで修業は大変でしたか？

(朝橋) 大変でしたよ。といっても、いわゆる普通の会社勤めをされている方の上下関係と変わらないと思うんですが、僕らの場合は就職ではないんです。落語というのは職業ではなく生き方なんです。契約を交わして師匠が弟子を採用するというものではなく、そばにいることを許しているだけ。師匠の顔で前座の頃は楽屋仕事—いわゆる師匠方にお茶を運んだり着物をたたんだりということをしてますが、それも師匠方のご自分でできることを「お前の師匠が許しているからやらせてやっているんだよ」とおっしゃっているだけのこと。仕事ではないんです。一般の職業というものとは本質が違うので、そこをはき違えてしまうと大変だと思います。

具体的に指導されることで面倒くさいと思うこともありますよ。楽屋ではまずお茶を出すタイミング。入って来られたときにまず一杯。着物に着替えられて高座に出られる前に一杯。高座を降りて来て着物を脱いで私服に着替えたところで一杯と、計3杯出すとマニュアルにはあるんですが、そのタイミングですね。人によっては熱いのがいい、濃いのがいい、薄いのがいい、お茶じゃなくて白湯がいいといろいろあるので、楽屋にいる全員分を覚えます。僕は寄席のチラシにこの人は濃いお茶って全部書き出しておくんです。うちの師匠は熱くて薄いお茶が好きなんですが、高座に上がるときは白湯がよくて、高座から降りてきた時はお茶じゃなくて酒が飲みたいという。弟子判断で絶対に出しません(笑)、人を見る、空気を読む、場を読む、それに応じた動きをするというのが修業の本質ですね。別にそこまでしなくてもいいんですが、それをしないと嫌われます。クビ

にはされませんが、存在を潰されることはいくらでもある。先輩には「お前をクビにすることはできないが、居られなくすることはいくらでもできる」と言われました。怖いですよ。相撲界から暴力を取ったら落語界ですから(笑)。

(水野) それでも、真打に昇進されるというのは素晴らしいことですよ。

(朝橋) 先代に言われたんですが、落語家は真打になってからがスタートです。相撲取りでいえばやっと十両に昇進して関取になったぐらい。幕内でもなく十両くらいです。ここからが長いんですよ。この後イベントらしいイベントは何もないんですからどうしましょう。10年に1度ぐらい燦々ぬまづ大使に選んでいただければありがたいんですが(笑)。

(水野) 己の芸をひたすら磨いてということでしょうか。

(朝橋) というのが理想ですが、芸を磨くというのはなかなか一朝一夕にできるものではありません。芸とは一方に伸びていくものではないのです。ずっと一定で、ある時グンと伸びてまた一定になる。油断すると落ちていきます。楽屋の隠し言葉で、いきなり芸がギュッ、ボン、と良くなることを「化ける」といいます。「あいつ化けたね」と。何かのきっかけで急に化けることがある。それ以外はずっと同じ。ずっとやっているからといって上手くなるわけではなくて、何かのきっかけがあって伸びる。よく昇進の前後は伸びると言いますね。そういう状況に身を置かざるを得ず、そういうところでたゆまぬ努力をせねばなりません。

一日稽古を怠けるとそれを取り戻すのに10日かかるといわれます。僕はたぶんすごく借金が溜まっていると思うんですが、それくらい芸というものは日進月歩のものではなく、先がなく、目標もない世界なんです。



(水野) 落語家さんの一日はどんなスケジュールなんですか？

(朝橋) よく聞かれるんですが日によって違います。仕事も朝早いときと夜遅いときがありますし、一概にこうですと言えませんが、今日は朝8時に起きてカミさんと二人でご飯を作って食べて、カミさんに弁当を作ってもらっている間に髭をそって髪を整えて、京急の駅までタクシーで行って新幹線に乗って車中で弁当を食べて来ました。

(水野) 稽古を一日でも怠ると、とおっしゃっていましたが、稽古はいつされるのですか？

(朝橋) 独演会の前などはきちんとやりますが、ふだんはお風呂の中とか移動中ですね。新幹線の中では、さすがにご飯粒飛ばしながらしゃべるわけではなく、頭の中で、ですが。

(水野) 膨大な記憶力ですね。

(朝橋) うちの師匠から言われたんですが、俺たちは会社勤めをしているわけではない。稽古はして当たり前。会社勤めをされている方が毎日出勤することが、俺たちの稽古なんだと。

高座に上がるときはある意味、次の稽古にもなるんです。高座というのは複雑で、本番でありリハーサルでもある。舞台上で落語をやりながら思い出したりすることもある。僕らの世界の言葉で「高座百篇」というのがありますが、高座で落語をやると稽古を百篇したくらい身になるという意味です。日々高座に上がるというのが、芸が伸びていく要素ではないかなと思います。寸暇を惜しんで勤勉に稽古をするような真面目な人間は、落語家にはなりませんね(笑)。

(水野) 沼津の母校でも高座をなさったということですが、朝橋さんのおかげで沼津でも落語が身近になりましたね。

(朝橋) いやいや地元の皆さんのおかげで落語をさせてもらっています。沼津で寄席や落語会はあるにはあるんですが、私が沼津に居た頃は目に触れなかったのが、2009年に後援会を立ち上げてもらったとき、僕からは、ぜひオープンな会にして敷居を低くし、一人でも多くの方が落語に触れられるようなすそ野の広い集まりにしてくれとお願いしました。その意味ではまいた種がちょっとずつ実になっているかなと思います。

(水野) でもこうしてたまに故郷に帰ってくると地元はいいでしょう？

(朝橋) 新幹線で三島に近づいて東レの看板を見ると、ああ帰ってきたなと思いますね。東海道線に乗り換えたときの車内の雰囲気や温度。ちょっと暖かいんですね、やっぱりこっちは。それで地元に戻ってきたなと実感します。エスカレーターのない沼津駅もね(笑)。私、9月にヘルニアをやってしまったので万全ではなくて、荷物を抱えて階段を昇り降りするとき、ああ沼津駅にエスカレーターが付くといいなあと思いつつやってまいりました。

今、SBSテレビでお世話になっていますが、ラジオもやりたいんです。鳳楽師匠といううちの入門の師匠がずっと長くやっておられますよね。あの粋を禅譲してくれないかなといつも思っているんですが、「笑点」以上に壁が厚くて(笑)。

高校生の頃はラジオをよく聴いていたんです。テレビと違って情報が少ない分、頭の中でいろいろ想像するでしょう。本を読むのと同じです。読書する人は落語が好きになるんですね。ラジオ文化というものが見直されているのが、落語家もてはやされるようになったのとリンクしている気もしますし、頭の中で想像する情報は強くインプットされますからね。

(水野) 今、SBSテレビの「エネばな」にご出演いただいておりますが、これからもっともっと、県東部はもとより、県全域でのご活躍を期待しております。これからどんな落語家を目指していけますか？

(朝橋) 沼津も静岡県も広いんですが、落語を初めて聴いたとか、ラジオで昔聴いたけど久しぶりに聴いたという方が多いんです。私が動けるうちにどんどん動いて、落語を聴いたことのない人に聴いてもらう。休日の娯楽に映画やテレビを観るうちの選択肢の一つとして落語を選んでもらえるよう、すそ野を広げたいと思いますね。

(水野) 今日は私もたくさん笑わせていただきました。笑いは健康にもよいといえます。本当にありがとうございました。

### ＜プロフィール＞

#### ■三遊亭朝橋(さんゆうてい ちょうきつ)氏

1978年沼津市生まれ。2001年筑波大学を卒業後、04年六代目三遊亭圓橋に入門し「橋也」と命名、08年二ツ目昇進、17年には真打昇進し三遊亭朝橋と改名。静岡放送テレビCM「エネばな」のエネルギー小断などにも出演。

## 『第23回東部地区分科会』

日時 2017年11月22日 13時～16時30分  
会場 ニューウェルサンピア沼津

# 原・浮島地区発展を探る～ 郷土を育てるまちづくりに向かって



サンフロント21懇話会第23回東部地区分科会が2017年11月22日に開催された。沼津市原・浮島地区の道の駅設置構想に合わせ、当懇話会が2万人収容の複合型スタジアムやJR東海道線新駅整備等を盛り込んでまとめた『原・浮島地区まちづくり構想』を主題に、同地区の発展の可能性を探った。

基調講演では全国各地で広場づくりに取り組む全国まちなか広場研究会理事の山下裕子氏が、富山市のまちなか広場「グランドプラザ」開業以降の運営手法を中心に、まちなかでのにぎわいづくりの手法を解説した。

続くパネルディスカッションでは山下氏のほか、原・浮島地区の道の駅構想を進める沼津市商工会の大村保二会長、慶応大学大学院の矢作尚久准教授、静岡県立大学の西野勝明特任教授が地域を活かすまちづくりについて意見交換を行った。

## 主催者代表あいさつ



静岡新聞社常務取締役

谷川 治

本日の東部地区分科会は原・浮島地区のまちづくりをテーマにしました。この地区は白隠さんゆかりの史跡が残り、最近では県によるA O Iパークの着工、新東名や東名スマートICの開設等々、将来に向かって発展が期待されています。サッカーJ3に新加入したアスルクラロ沼津は3位以上を確保し、新スタジアム構想も進んでいます。

こうした中でサンフロント21懇話会では道の駅構想、2万人収容の複合型スタジアムやJR東海道線新駅整備等を盛り込んだ「原・浮島地区まちづくり構想」を取りまとめました。本日の分科会では現状の課題、分析、将来構想について考えてまいりたいと思っております。

基調講演には全国まちなか広場研究会理事の山下裕子様をお招きしました。山下様からは「まちのにぎわいをつくるには」をテーマに、富山市で実践している、人が集う人が行き交うことの意義や方法についてお話しいただきたいと思っております。さらにパネルディスカッションでは「地域を活かすまちづくり」をテーマに、沼津市商工会会長の大村保二様、慶應義塾大学大学院准教授の矢作尚久様、静岡県立大学大学院特任教授の西野勝明様、そして基調講演の山下様にご登壇いただき、コーディネーターはTESSの青山茂様をお願いしました。

サンフロント21懇話会は23年目を迎えました。こうした活動が続けられますのも、会員の皆さまのご支援ご協力の賜物と感謝申し上げます。皆さま方のこれからのご健勝とご活躍を祈念し、私の挨拶とさせていただきます。

## 開催市代表あいさつ

皆さま方には県東部地区活性化のため、幅広い分野でご活躍され、本市に対してもさまざまなご提案をくださり、厚く御礼申し上げます。私が沼津市長に就任しまして早1年が経過しました。世界一元気な沼津を目指し、これまで市長と語る会等を通じてまちづくりの主役である市民の皆さまとの対話の充実を図るとともに、HP等を活用して積極的に市政情報を公開することで市民の皆さまにまちづくりに関心を持っていただき、積極的に市政に参画できる環境づくりをはかってまいりました。

本日のテーマである原・浮島地区では新東名駿河湾スマートIC供用開始、A O Iパークの開設、白隠の路や帯笑園の整備が進められているだけでなく、市民と地域が一体となって自然環境を活かした体験や食のイベント等が開催され、大変熱心にまちづくりが行われています。魅力と活力があふれたまちづくりには市民の視点に立ち、市民の力を活かすことが重要であると考えておりまして、今後も原・浮島地区はもとより、沼津市全体、そして東部地域が元気になるように市民・企業・行政が一体となってまちづくりを推進していきたいと考えておりますので、皆さまのご協力をお願い申し上げます。

余談になりますが、先日国交省にお願いに上がったとき、私の知り合いがいて、話をしました。今、神奈川県で御殿場以东の新東名高速道路の工事が進んでいます。国交省が一番思うのは、静岡県から成田空港が近くなるということ。そういう大きな変化によって国の産業、沼津市の産業にも大きな影響を与えるのかなと感じました。

今日の議論はまさにそのあたりとも関係あるのではと思います。皆さま方の活発なご議論をお願いしたいところでございます。



沼津市長

大沼明穂



## 基調講演

# ひとが集う、 ひとがにぎわう

GPネットワーク理事／広場ニスト

山下裕子氏



### 広場を愛し、価値を見出す「広場ニスト」

皆さまこんにちは。広場ニストという肩書、お聞きになったことはないと思いますが、当然として、私が勝手に名乗っており、私の中では広場を愛するすべての人を指しています。今、全国には広場的空間がたくさん展開されており、その開業支援をしております。個人的にタモリさんが大好きで、タモリさんに会えたらいいなああと友だちに話したら「広場ニストと名乗ったらタモリ倶楽部とかに出れそうだよ」と言われて名刺に書いてみたというのが発端でございます（笑）。

今日は富山市にあるグランドプラザの事例をお話しします。この写真をご覧になって何曜日の何時ごろかお分かりになりますか？ 平日水曜日の朝9時30分の様子です。グランドプラザは百貨店と駐車場ビルの間を広場化しており、百貨店が空いていない時間帯の朝9時30分であってもイベントのない平日でも60人ぐらいの人がいらっしゃいます。人口45万人の富山市で平日、日常的に広場にこれだけ人がいることを、各方面で高く評価していただいております。

皆さまはネスカフェのアンバサダーをご存知でしょうか？ ちょっと前までさかんにCMでやっていたんですが、ネスカフェの商品を社内で飲むようにするというしくみで、自ら「アンバサダーをやります」と希望すればコーヒーマシンが無料で提供され、美味しいコーヒーがわずか50円ぐらいで飲める。コーヒーの入れ替え等の手間がかかるので、アンバサダーに立候補していただいてマシンを提供するというシステムです。

何が言いたいかといいますと、広場というスペースを含め、今、人は交流する機会を非常に求め

ているのではないかということ。コーヒーを皆で飲むという時間を作ることによって社内での交流を促しているのです。広場のお話も、これまで実は少なくなっていた街中における人の居場所と交流を取り戻す動きではないかと思っています。

今日は交流という言葉の意味もお伝えしたいと思います。人と人が出会う機会だけでなく、眺めたり眺め合ったり見る見られる関係といえますか、そもそも広場的空間というのは世の中にたくさんあり、沼津にもあると思いますが、これまではハード整備が進んでも人に使われていないということで皆さん困っていらっしゃる。人に使われて初めて、人は場のことを場所として認識し、活動がより促進されるのではないのでしょうか。

### 通りや壁をなくして広場化すると 多様な活動が見えてくる

具体的な事例をご紹介します。これは大阪梅田の駅北広場です。大阪に出張に行かれた際にご覧になったことがあると思いますが、JR大阪駅のすぐ近くグランフロントさんの入口にある広場です。ふだんはビジネス街でここまでの人はいませんが、年末にイルミネーションの点灯式でも使われ、これだけの人がいらっしゃいます。

こちらは兵庫県姫路市の広場です。姫路城がある町ですからとても賑わっているのですが、駅前には人の居場所がなく、つい数年前に再開発事業でこのような広場空間が出来ました。

最後は富士山本宮浅間大社の中にある広場空間です。富士山がきれいに眺められる憩い空間が新しく整備されました。このように全国で人の居場所を作る街中広場の整備事業が、私が把握しているだけでも50以上のプロジェクトが同時に進ん

でいます。街中という場所は今も昔もたくさんのアクティビティ—人の活動行為がたくさん集積されているところですが、通りを介していたり、今日のように建物の中でやっている活動は、外からはよくわかりません。同じ面積のエリアを広場化し、通りをなくし建物をなくすことによって、このエリアでいろいろな活動があることがひと目でわかるようになります。

活動というのはそれぞれの地域、それぞれの場所、それぞれの空間で、それぞれがやっているとなかなか交わる機会はないのですが、この地域の真ん中はこのへんだねと皆さんが共通認識を持たれ、広場が作られると、たとえばイベントとしてメイン会場に使われたり、今日のように懇話を深める機会ができたり、イベントの宣伝をするためにチラシを持って行ったり作戦会議をするなど様々な用途に使われ、緩やかかもしれませんが横につながる機会を創出すると思います。富山の広場は屋根が付いていますので、365日使える場所です。365チームのアクティビティが富山に芽生えたら毎日のように富山に賑わいを創出するのではないかと考えて運営を続けています。

### “なんとなく居られる” 広場の良さ

広場の良さはたくさんあります。一つはニュートラルな場所であるということ。こちらはグランドプラザでピアノを演奏していただいたときの曲目です。アンパンマンのテーマ曲がありますね。コンサートホールではアニメソングはクラシックアレンジにでもしない限り、なかなか演奏する機会はないと思いますが、グランドプラザならこれだけの多様な音楽を奏でることができます。

今日は皆さまお昼過ぎにもかかわらず、真っすぐ真正面を向いて私の話を一生懸命聞いてくださっていてありがたいのですが、ここが広場的空間ならば聞いていなくても大丈夫です。通り過ぎることもできますし全然違う話をしても構いません。いろいろな人が一緒にいる状態を作ることができるというのが広場の良さじゃないかと思います。

コンサートホールではコンサートを聴く人しかいませんので皆さん熱心にコンサートをご覧になるわけですが、広場的空間のコンサートならば聴いている人もいれば眺めている人もいればちょっとだけ聴いて用事のために立ち去る方もいらっしゃる。その方々が同時に居られるというのが広場的空間の良さですね。

今日のようなしっかりとした目的意識のある場所も重要ですが、なんとなく居られるということによって、なんとなく居る人たちが集まってなんとなくおしゃべりをして、そんな中からアイデアが生まれたり新しい企画が生まれたりいろいろな人とのつながりが生まれたりします。「曖昧で多義の要素をひとつの空間で共存・成立できる」のが広場空間じゃないかなと感じています。

### 車を持つ人も持たない人も行きやすい広場

ここからは富山の広場の整備事業についてお話ししたいと思います。富山市の総曲輪通りという商店街に面しておりまして、富山県で一番の商店街となっているエリアです。個店が集積され、富山市道が3本ある中心エリアに大きな建物を建てることになって、市道を真ん中に集めて広場化しようと計画が始まりました。当初は百貨店の荷卸し場として機能させる予定でしたが、幅21m、長さ65m、約1400㎡という面積、しかも街一番の一等地をバックヤードにするのはもったいないということで、広場化することになりました。

もともと百貨店と駐車場ビルをセットで整備する事業でしたので、本来なら駐車場ビルと百貨店ビルをセットで整備し、百貨店の奥座敷的なところを広場化するというのが普通のプランだと思われれますが、富山の場合はたまたまですが百貨店と駐車場の間にセットバックしたエリアを設け、富山市道を集めたことによって真ん中を広場化した。今でも前者のプランでグランドプラザが整備されたとしたら、私は今ここにはいないと思うほど立地というものが大事だと思っています。

富山は日本で一番の車社会と言われていいますから、ほとんどの人が街の百貨店に行くにも車を利用します。そのとき街中で一番大きく一番停めやすく、オープン当初は料金も一番安かった、そんな駐車場が隣にあれば、ほとんどの方がこれを利用して百貨店に行くでしょう。その際に通りかかる場所が広場化されたのです。このことによって、百貨店に行くのがメインの目的であっても、今日は広場でこんなことをやっているから行ってみようとか、開業時間まで時間があるから広場で時間をつぶそうと、冒頭にお見せしたような風景になったのです。

こちらが整備前の様子で、一本の富山市道に面して映画館がありましたが、整備後はガラスの屋根をかけ、LRTを目の前に敷き、前が電停にも

なっています。電停があることで認知度が非常に上がり、公共交通で来られる方も増えました。

これからの時代は車に乗れない高齢者や車を持たない若者も増えますので、歩道を含め、歩きたくなるような公共交通の整備が重要になります。車を持っていなくても移動できる手段としての公共交通と、来たくなる場所の一つとしての公共広場があることが重要になってくると思います。

### キャッチコピーは『うれしいヒトと出会う場所。 楽しいコトと出会う場所。』

市道だった場所を自由空間にするには条例が必要でした。道路というのは非常に使いにくい状態もので、警察関係者がいらっしゃったら申し訳ありませんが、警察の許認可が必要な場所で、毎回使うたびに必要な手続きがあります。そこで、富山市では道路だった場所を外すための条例を作りました。条例というのは市ごとに作ることができるので、地域らしい条例を作るというのは地域の実情に合わせて運用しやすくする意味でも重要ではないかと思っています。

私が在籍していたグランドプラザの事務所は、行政施設の事務所ですので、「管理事務所」と名付けてもよかったのですが、あくまでも人の活動があって初めてそこが場所に見えるものですから、場の管理ではなく場所になるような運営をしようという心づもりを示すために、あえて「グランドプラザ運営事務所」という名前でスタートしました。

おかげさまで10年が経ち、すっかり定着しましたのでわかりやすく「グランドプラザ事務所」とシンプルにしていますが、当時は本当に街中が元気になるようなことを何でもやりました。たとえばお昼の美味しい店の情報を広場のブログに掲載したり、街の中でどんなイベントをやっているかチラシをたくさん集めて来場者にご案内し、回遊性を高める努力をしました。

今、全国の広場プロジェクトは50以上あり、専属スタッフがいて賑わいを創出するための広場空間というものが全国にたくさん生まれています。グランドプラザ開業当時の2007年はまだ広場の事例が全国になかったため、私たちスタッフは広場空間をどうやって運営していけばいいのかを考えることからスタートしました。まず賑わいの核となり街歩きの拠点となり、街の情報発信基地となるような広場にしたいと考えた。おかげさまで

この3つは実現でき、その波及効果で地価が上がり、人口も増えているとうかがいました。街の情報発信としては「なかもん」と平仮名で街中のエリアに特化したホームページ等もその後作られています。

グランドプラザのキャッチコピーは『うれしいヒトと出会う場所。楽しいコトと出会う場所。』。どんな場所にしたいかのコンセプトを皆で考えました。プロのコピーライターに依頼するお金がなかったのと、私たち自身がこの空っぽな場所をどういう場所にしたいのかじっくり考えたことが非常に大きかったと思います。他愛もない言葉ですが、現場スタッフと市役所の担当者と当時お世話になっていたコンサルティングの方と4時間以上話し合っただけで決めたことを今も記憶しています。

この言葉を決めた経緯が非常に大事だと思っています。年間130日以上の有料広場の運営管理を当時はたった3人のスタッフで回していたので、スタッフ同士で打ち合わせをする暇がなく、お客様が来られてはジャッジをする連続でした。しかしこのコンセプトをじっくり決めておいたおかげで、スタッフ間にブレがないと評判を頂くぐらい、いい判断といい運営につながったのではないかと思います。

### 広場が子どもたちの自由空間に

今ではおかげさまでこのように朝9時30分から、冬であっても何人かは座っていただく貴重なスペースになっていますが、開業当時は人があまりいませんでした。2007年というのは2008年の前年で経済的にも元気がなくなり始めていた頃で、総曲輪通りは県一番の商店街にもかかわらずジャージにスリッパのような格好で歩く人がポツポツいるといった状況でした。

私たちが最初にやったのは、自ら座って人がいる姿を創ることでした。やはり最初に申し上げましたように、人がいて人が使ってこそその場所です。誰も使っていない広場には人は寄り付きません。私たちはパソコンがあればある程度仕事が出来ますので、事務所がすぐ近くにあるにもかかわらずパソコンを持って広場に座り、人がいる景色というものを心がけて作りました。

おかげさまでこのように人が定着するようになりましたが、とにかく人がいない状態を脱するために何をしようかと一生懸命考えました。皆さまのようなビジネスマンの方が平日の日中にこのよ

うな場所にいたら、なかなか格好付かないという方もいらっしゃると思いますが、平日というのは土日より日数が多いですよ。その平日にこそ価値を高めなければなりません。平日に広場に来てくれそうな人といったら高齢者と子どもたちです。そこで富山県内の幼稚園・保育園・小学校に遊びに来ませんかと積極的にお声かけをしました。

街のことを考える人の共通点は、幼いときに街中で非常にいい思い出があったということ。どんな世代でもそうです。そこで私たちは街中に記憶と愛着を育む事業として実施しました。

といっても予算のない事務所ですから、どれも簡単に出来るもので、お弁当を食べに来ませんか？歌を歌いに来ませんか？チョークで絵を描いてみませんか？社会科見学の集合場所に使ってみませんか？といった素朴なご提案をさせていただきました。

とくにお弁当タイムは、静岡では今日のようなお天気は普通だと思いますが、北陸富山では晴天の日は年間100日もないのです。「お弁当を忘れても傘は忘れるな」と言われるぐらいで、遠足に行ったとしても急に雨に降られてということも非常に多かったので、お弁当を食べに行ける場所がある、屋根が掛かっている場所があるということでお問い合わせが多かったことを記憶しています。

一番多かったのはチョークでお絵描きというプランです。こちらはただチョークを用意しただけで、御影石の床ですから直に思い切り描いていただけます。よく考えたら、街に来て落書きをしてそのまま帰ってしまうというのは教育的にどうなんだろうと思い、グランドプラザでは最初から“来たときよりも美しく”という合言葉を大人にも子どもにもお伝えしています。

子どもに掃除をさせるの？と思われるかもしれませんが、実は非常に人気がある企画です。チョークでお絵描きのほうは子どもの集中力は30分が限界ですが、お掃除は水遊びのようなもので、デッキブラシが大人気。デッキブラシを持った子はヒーローになり、ブラシを奪い合いをしながら1時間30分以上お掃除をして帰っていきます。

こういったことは遊びであっても子どもたちが街にかかわる機会をつくります。あるお母さま方からは「グランドプラザに行ったら安心して子どもの手を離せる」と言っていました。非常に印象的な言葉でしたね。街中を歩く親御さんたちは一生懸命子どもの手をにぎり、抱っこしたりおんぶしたり肩車をしています。グランドプラザで

は子どもたちが伸び伸び過ごしていますし、お母さんたちは子どもたちを広場に置いて百貨店で買い物してしまうくらい安心した場所になっている。インターンシップで来られた学生さんには毎日毎日違う風景が繰り広げられる様子に「広場っていきものみたいですね」と言っていました。

## 生涯をかけてやるものと出会う場所

こちらは、とある日のグランドプラザの様子です。施設ごとに来た赤い帽子の園児たちも一般の子どもたちも一緒に遊んでいます。しかも自分より小さい子に対しては、どの子もちゃんとお兄ちゃんお姉ちゃんになったりして、多世代で遊ぶって大事なことだなと思いました。

こちらのお母さん方は非常に仲の良いママ友同士かと思ったら、全然知らない人同士で、たまたま息子さん同士が同い年で盛り上がって、積み木を積んで遊んでいました。こういった出会いが毎日繰り広げられています。

私はもともと建築を学んでいまして、アメリカの建築家ルイス・カーンが「都市とは、小さな子どもが歩いていくと、将来一生をかけてやろうとするものを教えてくれる何かに出会う、そんなところだ」という美しい言葉を残しています。この言葉に非常に感動し、こういったことを広場でも何か出来ないかと思って考えました。

富山県では鋳物などモノづくり産業が今もさかんです。南砺市には井波彫刻という伝統工芸の職人が200人もいて、その方々に日頃工房でやっている作業を広場でやっていただきました。職人さんたちからしたら普通の作業ですが、私たちが見ると道具一つホンモノはすごい迫力。子どもたちがそれを見て職人を志してくれたらな、と思いました。

こちらは広場の様子です。お弁当を食べているだけですが通りがかった人と会話をしたり、フラットな場所なので高齢者の方々も車椅子でも気軽に来られます。テーブルと椅子があるだけですが、毎日さまざまな景色が生まれます。

こういった仕掛けを続けた結果、お申し込みがなくてもお散歩コースとして定着するようになりまして、子どもたちの遊び場として定着したことによって、さまざまな方のお出かけしてくださる場所になりました。

最近公園ではなかなか人の姿がないといわれますが、公園は子どもさんたちが遊びたくても禁止

事項が多いようです。広場ではもちろんキャッチボール等は危なくて出来ませんが、禁止事項はあえて設けておらず、いろいろな方がいろいろなことを自由にできる場所づくりを目指しています。その結果、たくさんの方がいろいろな活動をし、それを眺める高齢者の方にもたくさんお出かけいただいています。まさに「都市の自由空間」という大阪大学の鳴海先生の言葉のとおり、都市の自由空間として皆さまに活発にご利用いただいています。

### 若者と企業のお見合いの場に

広場を活発にご利用いただくためのきっかけづくりとして、もう一つの事例をご紹介します。グランドプラザは1100㎡で終日全面利用だと20万円かかります。若い人たちは手が出ない金額です。そこでアイデアや行動力や時間のある若者たちと、予算はあるが新しいアイデアを求める企業の人たちをお見合いする場所を作りました。「スター誕生」や「マネーの虎」のようなことをイメージし、公開広場でプレゼンをしていただいたのです。

若者たちに斬新なアイデアを大型液晶ビジョンでプレゼンしていただいて、企業の皆さまに見ていただく。地方都市の良さって企業がほどよい規模だという点にあると思っておりまして、たとえばスターバックスのような大企業では何かをするにもアメリカ本部まで問い合わせなければなりません。地元の中小企業なら物事を決めるのも早い。よし、じゃあ応援しようと、若者のさまざまな企画が実現に至りました。

今でも続いている企画が「エコリンク」。氷を使わない樹脂のスケートリンクです。誕生して10年になりますが、今では日本全国で展開されていますね。とある若い女性の、ニューヨークのロックフェラーのようなイルミネーションがキラキラした場所を富山の街の真ん中に作りたいという夢物語で見事15社様が手を上げてくださって、当時は日本の代理店がなくアメリカから直接輸入だったので、15社の支援でも予算が足りなかったのですが、富山市長自らアイデアを後押ししてくださって機械を購入し、10年続いています。

富山は冬が厳しいので、冬に特化したアイデアを募集して実施されています。インテリアでも今では富山県産材を使い広め、高める事業として毎年1回実施してもらっています。

街中は若者がチャンスや挑戦を感じていただけるような場所であってほしいと思っています。「よそものは、勇気をつれてくる存在」と言葉がありますが、街の真ん中というのは歴史があるだけにいろいろなしがらみや関係性がたくさんある。若い人は地元出身であっても街にとってはいい意味でよそものです。その若い人のアイデアや行動によって新しい風が吹いて、いろいろなことや仕掛けやすくなってきたんじゃないかなと思っています。

### 若者には「NO」と言わない

グランドプラザ事務所ではインターンシップで学生さんを積極的に受け入れておりまして、一番多い年で16名の応募がありました。4名ずつ4回に分けて来ていただき、私たちにない新鮮な目で地域のことを感じ考え、感じたことを最後の時には広場で発表していただく機会も作っています。

若い人たちを受け入れる際、つねに注意していたことは「NO」と言わないということ。具体的に申しますと、富山大学の学生さんが、学園祭のPRをしたいとグランドプラザの使用を申請して来ました。ところが希望の日にはすでに富山県庁が県産材で造った遊具を展示したいということで全面お貸出ししていたのです。「先約があって貸せません」とひと言言えば済む話でしたが、私は若者には「NO」とは言わないと決めていましたので、どうしたら彼らの希望に応えられるか一休さんになった気分で一息懸命に考えてひらめいたのは、「通り過ぎればいい」ということ。彼らはこの広場に通行人としてこの格好で通り過ぎたのです。

当時はまだ“フラッシュモブ”のようなストリートパフォーマンスは流行していませんでしたので、皆さん何が起きたんだとびっくりされましたが、今思うと彼ら自身が申請を出して全面使用していたら、彼らしか参加しないイベントになっていたでしょう。それはそれでシュールだと思えますが、パフォーマンスというのは受け手がいてこそそのものですから、富山県庁の皆さんには多少ご迷惑をおかけしましたが、受け手となる皆さまが大勢いて、学生さんにとっても楽しい思い出となって今も語り継がれているようです。

今では地元の高校生も使ってくださっています。高校の授業でダンスが必須科目になっていまして、せっかく上手になったダンスをお披露目したいと

いう話になって、先生が「どこで踊りたいの？」と聞いたら生徒さんたちは「グランドプラザで踊りたい」と。今でも覚えています、高校生が突然事務所にやってきてグランドプラザで踊りたいと言ってきた。「申し訳ないが使用料が8万円ぐらいかかります」と伝えたところ、それでも彼らは踊りたいと言って、一人800円負担で100人参加しました。普通の高校生が踊るだけでしたが、当日は家族友人をはじめ、本当にたくさんの人が見に来てくれて、彼らのエネルギーによって街のにぎわいを創り出すことが出来ました。

こちらは開業数カ月後、高校生がデートしている様子を初めて見かけて、あまりにも嬉しくて遠くから隠し撮りをしてしまいました。それくらい街に人がいなかったのです。やはり街に若い人があるというのはその地域に未来があるということです。この高校生は缶コーヒーすら飲んでいませませんが、街に居場所があって街で語り合っ、ここでもしかしたら結婚式を挙げて子どもを連れてくるかもしれません。そんな思い出の場所になることが街にとって重要じゃないかなと思います。

### “気づき”が街中にあふれることが大事

こうした都市の自由な広場空間が出来たことによって、たくさんの若い人の思いや考えや実行力が発揮できる機会が増えると、街はますます元気になります。そうなると、広場では社会実験的な事業がメインになってきます。

屋内空間—たとえばこのような立派な部屋ですと、カーペットを汚したらどうしよう等いろいろな制約がありますが、屋外空間である広場なら何かこぼしても水で流せますし、いろいろなことが仕掛けやすくお試ししやすい。まずはたくさんのお試しを広場でやってみて受け入れられるかどうか、どんな評価があるかを見ていただいた上でハード整備をしっかりとされるというのが、今のまちづくりのスタンダードになりつつあります。

私は愛知県豊田市でも仕事をさせていただいていますが、ハード整備をする際、「作るチーム」と「使うチーム」の両軸を打ち立て、街中の広場の空間をまずは使える場所として市民の皆さんにご提供し、活動を行うきっかけづくりを「使うチーム」のほうで行っています。その様を見て「作るチーム」がどういった人がどういった使われ方をするのかを冷静に見て、たとえばここに水場が必要だとかアスファルトより石畳のほうが良いと

いった具体的な検討をします。

広場が出来たことによってさまざまな実験的なことができ、皆さんいろいろな経験をされています。先日、富山の広場でラグビー神戸製鋼の大西一平さんが「あるくひと」というプログラムを行い、私も参加したのですが、皆さんがまち歩きをした後、広場に集まってラジオ体操をしました。広場には日常的にくつろいで過ごす人がたくさんいて、すぐ横でラジオ体操をしてもそのままくつろいで微動だにしない。それくらい富山の広場でくつろぐ人は、寛容でどっしりくつろいでおられるのだと発見しました(笑)。

広場に必要なツールは、基本的にはテーブルと椅子です。世の中にはたくさんのテーブルと椅子がありますが、欲しいのは座りたくなるテーブル&椅子と雰囲気です。あと女性と子どもに優しい木陰ですね。皆さまもぜひ街中でベンチを見かけたら座面に手を当てていただきたいのですが、冬ならまだしも、夏の時期、座面が熱々になって誰がここに座るんだろうというベンチが少なくありません。やはり日陰と座り心地の良い椅子が増え、そこに座る人が増えることで何が起きるかという、歩行速度の減速だと思っています。

今日ここへはほとんどの方が車でお越しになったと思いますが、同じ道を車で通ったときと自転車通ったときと歩いたときとでは、気づくものが全然違います。やはり歩くというのは私たちの肉体だけで出来る行為ですし、動体視力に合った「気づき」がある。人に、知り合いに、新しいお店のメニューに、新しい商品に気づく、その気づきによって交流というものは始まる。気づきが街中に触れることが非常に重要だと思っています。

実際、筑波大学の学生さんが研究してくださったのですが、「富山の広場は商店街に面しているが、商店街から広場に入ってくるとより歩行速度が落ちる」という研究結果も出ております。テーブルと椅子があるだけですが、イベントでもないのにスケッチをしている女性がいたり、中国人のお医者様が出前を取ってオリジナルカフェにしたり高齢者の方々が集ったりしています。こうしたアクティビティを起こすため、100席ほどのテーブルと椅子を毎日模様替えをして新鮮な空気を作っています。

### 広場でサードプレイスを見つける

にぎわいという言葉をよく耳にされると思いま

すが、私の中で腑に落ちている定義はヤン・ゲールという人の「滞在人数×滞在時間」の積算です。富山の場合、当初、滞在人数が少なかったので一人のおじいちゃんが10時間居てくださったら、10人が1時間居ると同じだと思い、とにかく滞在時間が長くなるような工夫を考えました。ですがたくさん人がいる場所であれば滞在時間が短くてもいいわけで、滞在時間の質を上げるということも重要になります。

イベントの開催も重要ですが、イベントの開催を目的とするのではなく、人と人が横につながる機会の創出として手段にしていだければと思います。富山でやっている地ビールイベントは地ビール業者がやっているのではなく、富山の地ビール好きが富山県の地ビールにこだわらず全国選りすぐりの美味しい地ビールをセレクトした結果、東京からバスで団体が来られるぐらいの人気イベントになりました。同じような趣旨でカレーイベント、ワインイベント、チーズイベント等たくさんのイベントをやっています。

こちらは私が所属しているNPO法人が毎月第2木曜日にどんなに寒くても暑くてもオープン広場でカジュアルワイン会をやっています。定期的で開催することで広報せずとも50~60人が立ち寄って歓談を楽しまれ、ワインによって顔見知りが増え、人の輪が広がっています。

こうした機会をサードプレイスと呼んでいます。ファーストプレイスが自宅、セカンドプレイスが会社や学校、それに続く第3の場所です。カフェなど場所を指すことが多いのですが、これからは人間関係としてのサードプレイスがあることで人生を豊かにしてくれるのではと思います。人とつながっていく上で、家族は当然大事ですし、仕事仲間も大事ですが、趣味や飲み仲間のつながりも重要ではないかなと思います。そうした広場で出来た仲間とこの地域にどんなものがあるのか学び合って楽しむ機会も重要なのではないかなと思います。

### 抱負で多様な活動量を生む広場が、 地域を元気にする

いつも心がけていることは「楽しいから始める」ということ。もちろん課題解決も大事ですが、楽しいという気持ちから始めると長続きするし人も巻き込みやすいのです。

チョークでお絵描きして掃除する子どもたちも

そうですが、広場という場所では全員が主体者として存在できます。そうした主体者的な意識が芽生えた人たちが、広場が単なる居場所ではなく、自分の主体性を表現できる場所・フィールドとして成り立っていることに気づく。使用料を支払えば誰でも自由に使える場所ですから、本当に誰もが使いたくなるような仕掛けを心がけました。

結果、多くの一般の人に使ってもらえるようになりました。今、年間で一番多くの使用料を払っていただいているのは平山さんという主婦です。彼女は元々可愛いマルシェが好きで、当時富山になかったので京都まで出かけてマルシェに出展していたそうです。富山にこういった広場が出来たので京都や静岡からもお友だちを呼んで、年に4回マルシェを開催しています。それだけでは飽き足らず、フリーマルシェを春に開いている。年間5回、毎回20万円というなかなかの金額ですが、一人の主婦が10年間続けているんですね。

一番遠方の利用者は石垣島の皆さんです。北陸富山の人とはとにかく暖かいところに憧れていて、石垣島が好き人が多い、石垣島の人にマンガでも売りに来てくださーいと言ったら本当に来てくださって、この日は石垣島民謡も流れる楽しいイベントになりました。

これまでのイベントは、たとえばちょっと前まで流行っていた肉フェスのようにブースがいっぱい出てワーワーやるイメージが強かったと思いますが、これからは予算規模も縮小されますので、憩い空間の中にぎわいを創出するイベント的要素が点在するようなイメージになるのではと思います。

富山の広場のとある平日、東京からライブに来られたミュージシャンが、本番は夜ですが日中に時間があるということで、使用料3000円でストリートライブをやってくださいました。結果、3万円の投げ銭があったということで、美味しいものでも食べて帰りますと喜んでくださいました。ライブ中には手前で化粧品の試供品を配っていましたが、ストリートライブがあることでこういう場が成り立ち、音楽を熱心に聞く人、後ろの方で関係ない話をしている人、立ち止まっている人など非常に広場らしい使われ方になったと思います。

さまざまな活動がたくさん多様になることで、地域性やその人らしさである個性が生まれ、多様性というものにつながり、広場によって地域の活動量が増えることが大事なんじゃないかと思っています。リノベーションで世界的に有名な建築家西

村浩さんがおっしゃっていたのは「人口が半分になっても皆の活動量が2倍になれば一緒だ」ということ。それくらい私たちの活動量というものが重要になってくる。その結果、企業も行政もそうですし、地域で働く人も地域に通う人も地域を良くするエンジンになるのではないかと考えています。

### 禁煙にしていないグランドプラザ

実は昨日は和歌山県でシンポジウムがありました。千葉大学の卒業生が大学に通っているとき、千葉大の通りに花壇を植生して元気にするという活動をし、今は都内の有名な設計事務所で働いているのですが今でも休日には千葉に帰って活動を続けているそうです。

地域に住民票があるなしは関係ないんですね。その地域に故郷を感じたり懐かしさを感じたり会いたい人に会いに来る人を含めて受け入れ、二拠点居住・三拠点居住というものがどんどん普通になっていくんじゃないかなと思います。

都市計画の蓑原敬先生が「内発的な街の更新過程が働くようになる」とおっしゃっていますが、皆さんが意識されることで働くようになるんじゃないかなと思います。そのためには帰属意識が重要で、その活動拠点として広場が存在します。

広場を自由に使うことには問題もあるんじゃないかと指摘されますが、一緒にいることによってお互い様という気持ちが芽生えるんじゃないかと思っています。グランドプラザは実は禁煙にしません。喫煙者の皆さまのマナーは、最初は悪かったのですがだんだん良くなり、今も禁煙にしないでできています。

こんなふうに、楽しそうで、なんとなく来なくなる、居場所にできる場所がこれからの時代、重要になると思います。広場は開かれた大きなスペースですから、パソコンの前では思い浮かばなかったようなアイデアも生まれる場所にもなっています。広場では別々に遊んでいた人たちがしばらくすると一緒に遊んでいる。こういうことが日常的に起きています。彼らはお互いの名前も住所もきっと話さないままお別れすると思いますが、またこの広場で出会ったら一緒に遊ぶかもしれません。名前や所属ではないつながりが、広場の中では生まれつつあるのです。

都市の価値のはかり方というのは、歩行者通行量や人口等いろいろありますが、これからの人口

減少の時代、居ること自体が楽しめる場所が、都市の中にどれだけあるかも目安になってくるのではないのでしょうか。

最後に私たちNPOの活動をご紹介します。街中で人が自然に出会い、つながる機会をさりげなく作りたいと思い、イベントはあまり企画せず、出会う場としてのカジュアルワイン会を定期的に行き、後は学びの機会としてセミナーを開催しています。10代から80代まで幅広いメンバーが80人ぐらい、行政やコンサルの方など広場が好きいろいろな人が参加しています。年に1回はいつもお世話になっている広場の屋根掃除をして親睦を深めています。

ワイン会は定期的に行うということが大事ですね。おかげで広報せずとも50~60人ぐらい集まるようになりましたが、そうなるまで3年ぐらいかかりました。石の上にも3年じゃないですが、定着化して何も宣伝しなくてもたくさんの人に来ていただけるようになりました。

コンパクトシティでは人と人がバッタリ出会う機会というのが大事で、沼津もそういうエリアじゃないかなと思います。渋谷のスクランブル交差点では、1回の信号で3000人が渡っているそうです。1回3000人が通り過ぎたとしても知り合いにバッタリ会うなんてとても想像できませんが、人は少なくともバッタリ出会えるというのがいい。そこに広場があって開かれた人間関係が出来て人に投資するような事業があれば、街はきっと元気になります。

岡倉天心の茶の本の中に「虚はすべてを容れるが故に万能であり、虚においてのみ運動が可能になる」という言葉があります。ぜひ虚の空間である広場がこのエリアに出来て活発な活動が始まることを祈念し、お話を終わりたいと思います。

### ＜講師プロフィール＞

#### ■山下 裕子 氏

1974年生まれ。全国まちなか広場研究会理事、NPO法人GPネットワーク理事。富山に移住し、演劇やアート関連イベントの企画制作に携わる。2007年よりグランドプラザ運営事務所勤務。09年(財)地域活性化センター第21期全国地域リーダー養成塾修了。10年より麻まちづくりとやまグランドプラザ担当。11年よりNPO法人GPネットワーク理事。14年より広場ニストとして独立し、その後豊田・久留米・明石・神戸をはじめとする全国のまちなか広場づくりに関わる。



# 「沼津市原・浮島地区まちづくり構想」 サンフロント21懇話会からの提言

静岡新聞社・静岡放送 東部総局長 海野俊也



## 「時空を超え、人・モノ・情報が行き交う複合交流拠点の創出」

サンフロント21懇話会では懇話会会員であり、沼津市西部地区で「道の駅」構想を推進している沼津市商工会様より、同地区の将来像を描けないかとの要請に応じ、新たにJR新旅客駅や新スタジアム建設を含めた「原・浮島地区まちづくり構想」を策定し、川勝県知事、大沼沼津市長に提言いたしました。構想の中身について説明させていただきます。

まず背景ですが、原・浮島地区は東海道の宿場町、白隠禅師ゆかりの地として固有の歴史・文化資源に富む地区です。しかし沼川の水害懸念、国道1号線バイパスのほかは東西・南北とも交通インフラが脆弱なことなどで開発が遅れていました。この地域が県による新沼川放水路の着工、東名・新東名のスマートICによる混雑の解消、東駿河湾環状道路の西進予定などから、この地域が他の地域にない交通の要所として将来の開発可能性が高まっています。

そこで、この地域に東海道線の新駅を設置してはどうかと考えました。地区周辺の幹線道路の整備と併せれば、相当の交通結節点として非常に便利になるのではと感じられます。候補地としては原駅と東田子の浦駅のほぼ中間点になります。生活の至便性が増すというだけでは新駅設置の理由としては弱い。ため、新たな人の流れを生む広域の交流拠点として新スタジアム建設を構想しました。

皆さまご存知の通りサッカーのアスルクラロ沼津がJ3に参入し、初年度から優勝を狙える位置にあります。J2昇格の条件として、現在の県営愛鷹広域公園スタジアムの収容人数は改修を行えば問題ないのですが、駅から遠いということと、10年後に目指すJ1昇格にはそれでも足りず、市民やサポーターからも駅の近くにスタジアムが出来ないかという声が高まっております。

そこで提案するのが「時空を超え、人・モノ・情報が行き交う複合交流拠点の創出」です。すなわち周辺幹線道路の整備と新旅客駅、新スタジアムにより新たな人の流れとにぎわいを創出することを目指します。にぎわいの拠点となる新旅客駅と複合型スタジアム、地域にシンボルとなる祝祭空間を核に、交流・交通結節点と建設地を生かした道の駅、ここでは地場産品ほか、この後パネリストを務めてくださる矢作先生のAOI-PARCとの連携も考えられます。

またアクセスの利便性を活かした物流センターゾーン、さらに文化遺産を未来に継承する観光まちづくりを目指す白隠の郷、健康文化タウン等を配置してみました。地元からの要請が強い南北交通のためのアンダーパスゾーンも加えました。新旅客駅は沼津市の鉄道高架事業の新貨物ターミナルの西の一角を想定しています。ここから国道1号線バイパスを挟んで物流センター、健康文化タウン等を配置します。複合型スタジアムは現状、新旅客駅に隣接したところはどうかと考えております。

## にぎわいの核となり防災拠点としても機能する複合型スタジアム

ゾーンごとに説明しますと、地元の要望が強い道の駅では、地元農産物のほか、AOI-PARCと連携し、新しい農産物を扱ってはどうか。地区農業の6次産業化の拠点になればとも考えています。農の郷の誇り—これを基盤に整備します。

白隠の郷は白隠禅師ゆかりの松蔭寺をはじめとする歴史文化資産が回遊できるよう、統一感ある街並みや回遊散策路、桜並木などを整備し、来訪者も地元の方も楽しめるまち形成を目指します。

物流センターゾーンの考え方としましては、東名・新東名のスマートICによって浮島地区は有望な拠点となります。現在ネット通販の巨大倉庫が雇用の場として注目されており、首都圏や中部圏の中間点として必ず強みになると考えております。

複合型スタジアムの考え方としては、まずJ1加入に必要な2万人の収容人数を想定しました。新旅客駅隣接を想定していますが、海岸からも近いので、防災拠点としての機能も果たします。仮に新駅に隣接していなくても、駅から徒歩圏内であればかなり使い勝手のよいスタジアムになるのではと考えております。

複合型スタジアム等を中心にまちづくりが成功した例としては、先ほど山下先生がご紹介くださいました富山のグランドプラザ。私も先日、旅行の折に立ち寄らせていただきました。朝9時ごろでしたが子どもたちが逆バンジージャンプをしていて歓声が響き渡り、にぎわっておりました。富山は新幹線の開通で観光地としても非常に注目を集めている町です。

ヨーロッパのサッカースタジアムはエンターテインメントやオフィス機能も備えた複合型が増えています。アメリカの野球場でもパーベキューが楽しめるようなスタジアムが増えていますし、国内でも日本ハムや楽天が構想を進めています。

今日お示したパワーポイントの図面や構想はサンフロント21懇話会のホームページに掲載しておりますので、どなたでもご覧いただけます。10月29日には川勝知事、30日には大沼市長に提言させていただき、素晴らしい構想だとの高い評価をいただきました。

この構想は将来の可能性として、ここまで出来るというものをお示したものです。当然いくつものハードルがありますから、出来るところからコツコツと進めていただきたいと思います。それに向けては地元の熱意というものが何としても必要です。そして情報の共有。先ほど山下様が「エンジンは住民である」とおっしゃいましたが、まさにその通りです。今後、この地域の盛り上がりを期待し、説明を終わらせていただきます。

## パネル 討論

# 郷土を育てるまちづくりに向かって



〈パネリスト〉

大村 保二氏(沼津市商工会会長)

西野 勝明氏(静岡県立大学情報学部・大学院特任教授)

矢作 尚久氏(慶応義塾大学大学院 政策メディア研究科准教授)

山下 裕子氏(GPネットワーク理事・広場ニスト)

〈コーディネーター〉

青山 茂氏(シード副社長、サンフロント21懇話会 TESS研究員)

## 100年に一度の好機

◆青山 一部では山下さんに交通の結節点として広場を活用する、一等地に広場を作って車に頼らないコンパクトシティづくりを進めているというお話をうかがいました。交通の結節点として街中の超一等地を広場にすることですね。

◆山下 日本は先進国の中で最も早く超高齢化社会を迎える国。その中でも最も高齢化が進んでいるのが富山です。そのことに気づかれた市長が公共交通に特化したまちづくりを10年以上前から進め、ようやく時代が追い付いたというところでしょうか。

車社会だった富山では、男性が一人で日中路線バスに乗るという姿はなかなか見られなかったの

ですが、先日の日曜昼間に確認したところ、路線バスの乗客約20人のうち、半分が高齢男性でした。それだけ公共交通への特化が進んでいるということです。

◆青山 先ほどご覧いただいたサンフロント21



青山 茂氏

の提言は、基本的には歩行圏内にまちの機能を整備し、新駅とともに新たなコンパクトシティを新駅とともに作っていくというものです。まさに

富山が先行する社会なのかなと思いました。

今日はサンフロント21の提言をバックボーンに、原・浮島地区の可能性と課題を明らかにし、可能性を活かしてどのようなまちづくりの方向性を見据え、具体的にどのように進めたらいいかお話しただければと思います。

まずは地元の大村さんにサンフロント21の提言を通して、新たに見えてきた可能性や課題についてうかがいます。

◆大村 本日は原・浮島地区を取り上げていただき、ありがとうございます。この地域で暮らして50年弱になりますが、私が申すまでもなく、県東部でどちらかといえば関東圏に近く、風光明媚で気候的にも優れており、可能性の大きい地域だと思います。私が商工会の会長を仰せつかった5年前は新東名が開通した年で、5年経った今ではスマートICができ、東海大学の跡地もAOI-PARCとなり、ここを拠点にいろいろな農産物の研究がなされています。

この地の課題は地盤が軟弱だということで、企業立地の障害の一つになっていました。今は放水路が着工し、地盤改良も進んでいます。まさに100年に1度のチャンスだと思い、提言をもとに地域を挙げて夢を実現したい。皆さんと一緒にまちづくりを進めたいと思っています。

◆青山 100年に1度という力強いお言葉がありました。サンフロント21の提言に対して地元ではどんな声がかれましたか？

◆大村 企業経営でもそうですが「うちの会社は上場していくんだ」と言えば社員のモチベーショ

ンは上がります。地域も将来こうなっていくんだと希望を持つ。それが見えないと全然違います。

私は長泉の出身ですが、子どもの頃は寂しいところでした。ところが今は、がんセンターを中心に長泉なめり駅や246バイパスが整備され、昔の面影はまったくありません。長泉にいたほうがよかったと思えるくらい、50年経つとこうも変わるのかというまちになりました。この地域も負けないくらい可能性がありますので、それを信じております。

## AOI-PARCの挑戦

◆青山 皆さんは実際に原の周辺を歩かれたことはありますか？白隠禅師ゆかりの松蔭寺や長興寺、西念寺、清梵寺さんなど原駅から数分のところに寺町として極めて静かで歩くだけで癒されるような風情がそのまま残っています。静岡県の中でもああいう街並みが残っているのは非常に少ないと思います。

一方、旧国1を西に進み、旧東海道に入って一本松の交差点から国1をズンと抜けると根方街道で、そこから新東名もすぐ近くです。先ほど新東名の御殿場以東が整備されると成田が近くなるというお話がありましたが、まさに国土形成をしている軸ですね。そこがすぐそばに来ている。静と動を併せ持つ大きな可能性がある地域だと思っています。

この地にはかつて沼津御用邸に野菜や果物を納める、いわばブランド農作物を作る農家がたくさんいましたが、就農者の高齢化や後継者不足、耕作放棄地等、農業が様々な問題を抱える中、AOI-PARCが出来ました。矢作さんは医師でありながら、全国の医療情報を統合可能にした世界初のクリニカルデータマネジメントネットワークを設計し、2014年から稼働・実装されている医療のICTのスペシャリストですね。今度は農業のICTをAOI-PARCで始められるという。その辺の経緯と、ご自身の研究と連携することで農業にどのような新しい側面が見えてくるのかお話しください。

◆矢作 実は静岡県とは不思議なご縁があり、研修医1年目に研修に行ったのは静岡市で、かれこれ10年間、裾野市の小児科クリニックをお手伝いさせていただきました。大村さんがおっしゃったように、長泉町を横切ると、街ができるという

のはこういうことかと私なりにすごく実感しておりました。

診療時に気づいたことですが、10年前は患者さんから「抗生剤を出してくれ」といわれるのが9割以上でした。抗生剤や抗菌薬というのはあまり効果がないんですよと言いつつ、3年経ったら誰も言わなくなりました。

そういうことが医療上のビッグデータで検証できないのかと思われがちですが、近年言われるビッグデータというは大雑把なものが多いのです。我々がやっているのは個人個人の履歴をきちんときれいにとってこうというもの。小児分野に先立つこと3～4年前から成人での取り組みが始まっていましたが、我々は事業規模としては10分の1ながら、年数にして半分で実現できました。実は匿名化というキーワードを見直したのです。

生年月日というキーワードがあるとすると、それで個人が特定されてしまいますし、小児領域では匿名でやっても生後数時間単位での変化をとらえるのは非常に難しい。であるならば、同意を得て公明正大にやってみよう。当時、同意取得のデータは7割がた提供不可という報告があったのですが、我々は99%取得できました。これは私の性格でもあるんですが、逃げも隠れもせず真面向勝負で患者に向き合い、人の人生に寄り添っていききたいのです。

小児科では子どもを見ると家庭が見えてきます。家庭が見えると地域が見える。地域が見えると生活が見えてくるのです。今回AOI-PRCのお話をいただき、なぜ最初に我々に白羽の矢が立ったのかを考えてみたら、農・食・健康を束ねていくところが未だにあまりない。医療では医療の世界の話ばかりです。小児科は家庭の日常生活を見ます。身体に入るもの・食べるものを、データを含めてきれいになぞらえていく。最初は大変なお話をいただいたと思いましたが、話を煮詰めていくと、世界でも例がない取り組みだろうとワクワクしてきました。

おかげさまで今年8月、正式名称Agri Open Innovation Practical and Applied Research Centerとして立ち上がりました。この中で慶應義塾のSFC研究所は「AOIラボ」という名称を付けました。研究・教育・産学連携の3本柱で進めており、とくに教育連携―地元の小中高との交流や静岡県立大学との連携を重視しています。日本の健康医療教育というのは非常に遅れていますので、

小中学校の段階でやっていく必要があります。早い段階から第一級の研究を見せて刺激を与えられないかと考えました。

研究課題は大きく2つ。ひとつはAI農業。農業そのものを科学とデータで高度化させる。2つ目は農業と食糧と健康情報の連携です。

今、全国でも静岡県でも農業就農人口の減少が顕著です。医療分野でも臨床技術の継承問題、すなわちベテラン技術者の暗黙知をどうやって伝えていくかが課題となっています。日本の農産物の産出額はずいぶん落ちており、多くが海外からのものでまかなわれています。このようなピンチをチャンスに変えるべく、6次産業化によるブランド化や付加価値化を図る。これは避けられない現実です。

マーケティングブランド力の点では、この地域の潜在力は十分にあります。なんといっても流通の拠点として東京や名古屋や静岡市を含め、動脈のすぐ脇にある。がんセンターや周辺の産業を含めて統合していく大きなチャンスもある。このような付加価値をどう考えていくかが肝要です。

安全安心というキーワードは日本では当たり前を感じられていますが、海外の農作物での安全安心は、物流を含めると非常に難しいといわれます。バリューチェーンそのものをどう具現化・可視化するかがポイントで、我々の研究は場合によっては世界に打ち出せるものになり得る。当然、生産の段階から低コスト高機能で効率的な生産方法をしっかり見抜いていく必要があります。AOIラボの中には全天候型であらゆる環境を創り出すものが実装されており、どういう経緯で農作物が育つか経過がたどれるようになっていますので、そこで熟練農家の卓越した栽培ノウハウ―暗黙知を形にしていきたいと考えています。

遺伝子工学の分野では、遺伝子操作と聞くとアレルギー反応を起こされる方もいらっしゃいますが、最近では遺伝子にちょっとした傷をつけ、物流上の品質管理に活かすという方法も注目されています。コピー商品やニセ農産物が出回りにくくなるのです。日本のイチゴが韓国で破格の値段で売られ逆輸入されているニュースを聞かれたことがあると思いますが、日本の農業のそういった知財管理の難点・弱点をどう保護していくか。お茶の葉一つとっても差が見分けにくいのですが、遺伝子操作によって違いを明確にすることが可能です。単に農産物だけでなくその周辺を含めてし

っかり技術化し、付加価値を創り出す。それをビッグデータと併せて科学的裏付けエビデンスとして展開していくことを考えています。

### 地域の子どもたちに先端技術に触れる機会を

◆矢作 もう一つ情報というキーワード。医療や



矢作 尚久氏

食というキーワードはあっても、健康というキーワードが遅れているのが日本の現状です。ビル・ゲイツらがやっているような成分分析と健康とい

うキーワードで進んでいるプロジェクトから比べると15年ぐらい遅れています。

これまでのビッグデータは比較的大量のデータを対象にしますが、我々は個人とそこご家族を一括りにし、最適な健康生活を支援することを目指しています。情報流通基盤というキーワードになってきますが、日常的に無意識に行う行為のデータをきれいに紐づいていく。簡単に出来ると思われるかもしれませんが、ちゃんと使える環境、還元する環境にするには実はとてつもない労力を要します。我々は統合する技術を持ち合わせているので、まずはプラットフォームを作っているところです。

その先に見えてくるのは、心身の状態です。ここ10年来いろいろな研究が進み、たとえばうつ病患者が農業を手伝うことによって体のリズムが整い、復職できる時間が短縮されてきた等の報告がなされています。我々は研究のための研究ではなく、まちづくりの中でどう活かされ、住民の日常生活に還元できるか、人との交わりに戻せるかを考えていく場を目指しています。

教育連携では大学生の受け入れ、地元との連携を積極的に進めます。研究所の見学受け入れ、出前講座等を行い、こういう研究環境が身近にあることを知っていただき、知的好奇心を刺激し、体験する場を作っていこうと考えています。できるだけ10代の早い段階で先端技術に触れる機会やプログラムを、可能であれば地域の中学高校と連

携して作りたいですね。大きなハードルもありますが、10年後、結果として子どもたちが大人になってここでやりたい、戻ってきたいという循環につながり、有望な人材が県外流出することなく定着できればと願います。それが世界水準のまちづくりとして静岡県内に広がっていったら面白いんじゃないかと考えています。

◆青山 今まで健康生活とか健康のまちづくりというのは極めてあいまいな世界でしたが、今のお話は非常にしっかりとデータ化され、それがまちづくりの戦略に入っているということですね。私はつねづね、農業を成長産業にしていかなければ農業人口の回復や放棄地対策は進まないと思っていましたが、一つの答えがAOI-PARCにあるようです。

### 大きなポテンシャルを持つ東部地域

◆青山 西野さんは静岡県の産業政策についてずっとお考えですね。原・浮島地区が交通拠点として持つポテンシャルについて、それを活かす産業についてお聞かせください。

◆西野 この地区のポテンシャルを考える場合は、



西野 勝明氏

県東部地区全体の特徴を見なければなりません。静岡県は東西に広い県で、県西部は世界でもまれな産業集積の地。中部は地場産業を育てる地域

で、行政の中心でもあり、商業関係もかなり活発です。東部地域は伊豆と分かれますが、非常にグローバルな企業が立地しており、本社機能はないのですが研究所や工場を中心に、輸送用機械、電機電子産業が進出しており、富士の製紙業は全国一です。ファルマバレー構想は産業政策としては成功し、全国の中で医療健康産業では生産額第一位を獲得。医療やバイオ、薬品も先端産業として次の静岡県の産業をリードしています。さらには炭素繊維やセルロースナノファイバー等の素材産業も新しいものが出てきており、総じて東部地域のポテンシャルは非常に大きい。後はぜひ地域に

本社機能を持つ中小・中堅企業が頑張っていただ  
きたいと思います。

東名、新東名、さらに東駿河湾環状道路が延伸  
すればさらに大きなポテンシャルになると思われ  
ます。平成31年には中部横断自動車道が開通し  
ますと、清水からこの地域にかけて物流の拠点に  
なり得る。「君は太平洋を見たか」「日本海を見  
たか」を目標にしてきたわけですが、新潟～長野  
～山梨から多くの観光客も来てくれるのではない  
かと思います。

歴史文化的な資源も非常に豊富です。白隠さん  
の松蔭寺以外にも浮世絵に出てくるような風光明  
媚な地が多く、沼津は文人墨客の足跡にも恵まれ、  
文化でも売れる地域です。インダストリ4.0とい  
う新しい産業の新潮流が湧き上がっており、それ  
をうまくつかまえて観光のICT、IoTを使った新  
しい試みが進んでいます。県立大学には情報系の  
教授が大勢いまして、JTB等と連携し、V字回  
復した熱海市の試みに加わっています。

県大経営情報学部では観光コースを創設すべく  
準備をしています。原・浮島地区の発展に少しで  
もお役に立つよう連携していきたいと思っていま  
す。

◆青山 観光ICTでは、情報をいかに活かすか  
が大きなポイントになりますね。

◆西野 ビッグデータを集めることで観光客の志  
向が個人ベースでも追えるようなレベルになっ  
ています。今までは大衆を呼び込むような戦略だ  
ったのが、今は個別の、マニアックでテーマ性の強  
いお客を呼ぶ。大衆を相手ではなくテーマを持っ  
た質の高い人々を呼び込むということです。

たとえば日本に来る外国人のお客様で最近では  
日本の農家の昔の体験をしたいとか、盆栽を学び  
たい、和食を学びたいという人がいます。原・浮  
島地区なら禅を学びたい、白隠さんの健康法を学  
びたいという人ですね。そういう人は必ずリピ  
ーターになってくれます。このような質の高い人々  
を個別にターゲットにして呼び込むという戦略を  
とるべきで、原・浮島地区はそれができる地域資  
源が多いと思っています。

### 交流しやすい場所を、周辺を含めて拠点化する

◆青山 以前、山下さんが久留米の件でご講演を  
されたのを拝見しました。久留米も「何にもねえ」  
と言われたところだったが、昔から人が通い合っ

ていた。原・浮島地区も東海道五十三次の宿場町  
で広域交通の拠点です。にぎわいのまちづくりの  
方向で考えたとき、今後の可能性についていかが  
でしょうか。

◆山下 一昨年まで久留米の仕事に関わっていま  
した。久留米は福岡県の都市ながら筑後川流域に  
あり、九州のクロスロードです。車に頼らない時  
代は問屋街として鹿児島や長崎、大分からも物を  
買いに来る人が来て、銀行が集積し、花柳街も出  
来て物流がさかんでした。今は問屋街というもの  
がほとんど機能していませんが、人と人との交流  
拠点としてのポテンシャルは残っている。すなわ  
ち久留米は近くて行きやすいというイメージが残  
っていて、熊本から福岡は遠いけど久留米は近い  
ね、と思っている人が多いのです。

九州は本州から距離があり情報が少し断絶して  
いるような気がしましたので、東京や大阪で活躍  
する経営者を久留米にお招きし、九州ではなかな  
か聞けない人の講演会を久留米の若者と一緒に企  
画しました。熊本や長崎や大分、台湾からも聴講  
者が来て、聴講者同士の交流も始まりました。講  
演会ですらひとつのきっかけとして交流拠点にな  
っているのです。交流しやすい地域だからこそ地  
域にこだわるのではなく少し広域に見て、周辺  
のエリアを巻き込んで交流を促進していく。そう  
いうことを久留米では実践しています。

### まずは経済基盤の維持発展と 若者のUターン促進

◆青山 西野さんは、原・浮島地区という非常に  
可能性を持った地域を育てる上で、最初に何を考  
えなければならないとお考えでしょうか。

◆西野 地方創生というキーワードのもと、全国  
各地でまちづくりが始まりましたが、私が痛切に  
感じるのは人口減少の社会減—これが地域にジワ  
ジワ効いているということです。全人口が増えて  
いる時代の地方→都会への人口流出はあまり大き  
な問題にはなりませんでしたが、全人口が減少し  
ている中での大都市集中は、地方が維持できる閾  
値を超え、後戻りできないような衰退をもたらす。  
非常に恐ろしいことだと思っています。

札幌、仙台、名古屋、広島、福岡といった地方  
中枢都市は元気でも、それ以外の県庁所在地は空  
洞化がすさまじく進んでいます。静岡市でも今ま  
で経験していないことが起きています。呉服町商

店街は鹿児島、熊本と並んで全国でも活気のある商店街として有名でしたが、今の呉服町には非常に劣化しており、老舗がなくなってコーヒーチェーンやドラッグストア、居酒屋が幅を利かせています。空き店舗が3つもあり、昼間から客寄せがうろうろしている。今までの呉服町では想像できません。それくらい静岡市も衰退の減少が現れつつあります。

沼津市はご存知のとおり2016年、社会減第一位（-869人）となりました。原・浮島地区の維持発展には当然、沼津市全体の経済基盤の維持発展が必要です。まさに運命共同体ですね。JR高架化に伴う空き地をいかに中心地の発展につなげるかが生命線になるでしょう。と同時に地域のポテンシャルを活かし、新しい環境変化に適応したまちづくりを進めなければ20年後にどうなっているか想像に難くありません。まずは経済基盤を維持発展させるというのが第一に来ると思います。

具体的にはまだ十分間に合います。先端産業の基盤が出来ておりますので、あとは企業を活用し、次の企業のどう呼び込むか、新しい分野の産業をどう生み出すかです。その意味でAOI-PARCの取り組みは素晴らしい存在で、先ほどの矢作先生の「故郷に戻って来る人材を作る」というお話はまさに我が意を得たりの思いでした。

実は今、大学も地盤沈下しておりまして、大学の教員は、高校にリクルート活動に行っているんです。東京の有名国立大学や私立大学の教授がガン首揃えて模擬講義をする。大学は選ばれる存在になってしまったのです。ただ講義の教科書を読んでいればいいという大学教授は今はいません。それくらい大学も厳しくなっています。

高校レベルでは若い女性を中心にUターン率が20%下がっています。これは深刻な問題で、皆さんご家庭でお子様を育てる時、地方税を使い、家計からも莫大な投資をしています。県立大学を卒業させるのに機会費用を含め一人1700万ぐらいかかる。それだけ投資して育てた人材がいざリターンを期待する段階で東京から戻らず、地元は何も残らず、親は孤独死する。笑い事ではなく、私が住む葵区の某有名銀行の重役をやっていた人の子どもが2人とも東京へ出てしまい、そのご主人は孤独死したのです。

地域マネジメントの視点からみたら、こんな非効率な投資はありません。リターンを生む人材が戻ってきてくれなければ投資効果がない。故郷に

戻って来るという働きかけを高校の段階からしっかり行うべきでしょう。

## AOI-PARC発の特色ある農産物を道の駅で

◆青山 サンフロント21懇話会の構想にあった道の駅は、運営まで商工会が関わると聞いていますが。

◆大村 商工会はもとより商工業の発展、地域の



大村 保二氏

発展を目指しています。原・浮島地区もかつてはお茶やみかんが主流でしたが、今は低迷し、農業を受け継ぐ人がいなくなりました。

単純に言えば

儲からない、やっていけないからでしょう。道の駅は前々からあり、一時とん挫した経緯もありましたが、地域農産物の拠点としてしっかり機能させたい。

全国にかつて600~700カ所だった道の駅も今は1200あり、儲かっているところがあればそうでないところもある。商工会でいろいろなところに視察に行きましたが、昔はトイレ休憩や情報の拠点だった道の駅が、今や道の駅自体を目的に、そこにしかないものを買いに来る、そういう特色ある道の駅が成功していました。我々も当然、地域ならではの一品逸品運動を展開し、その店ならではの商品を商工会としても推しています。

AOI-PARCにはなんとか地域に根を下ろしていただき、研究されたものを地域で作って、売らせていただきたいと思います。農家のおやじさんが食事時に「こんなもの作っても売れねえよ」と愚痴る。それを聞いた息子が農家を継ぐはずがありません。私もちっぽけな会社を経営していますが、社員や家族の前では「必ず儲かる」「必ずよくなる」と言い続けています。ぜひAOI-PARCで地元農家を活用していただき、道の駅で試していただきたいと思います。

先日、住民アンケートを行ったところ、60数パーセントから回答がありました。皆さんかなり関心を持っていると思われます。国道1号線は一

日5万数千台という全国有数の交通量を誇ります。そこに地域の特産品を扱う道の駅を作る。商工会は原と戸田にありますので、戸田からも深海魚等特徴ある産物を出していただく。ちょっと他にはない道の駅だと言っていただけでも、地域の活気を取り戻したいと思います。

### 医療業界の物流チャレンジを農業に応用

◆青山 矢作さんに強烈なラブコールがありましたが、いかがですか？

◆矢作 先ほどバイオテクノロジー的なお話をしましたが、伝統的に非常に品質の高いものを安定的に提供する技術として有望です。時間がかかりますが、今その農産物をどれにするか選定しています。

皆さん聞いたことがあると思いますが、ダビンチという手術ロボットがあります。遠隔操作で手術ができてすごいというイメージが一般的だと思いますが、臨床現場では座って手術ができる点が評価されているのです。ご高齢で長時間の手術は耐えられないが、ものすごい技術を持っている先生方が、座って手術できる。発想を変えてみると農業でも重労働を軽減できる。実際に手を動かされてきた生産者の暗黙知を技術化する際に活用できるのです。

農業の熟練者と初心者を比べると、理屈と知識はほぼ同等なのに、葉の剪定作業等はスピードも方法も全然違います。農産物は年に1度しか収穫できないものが多いので、シミュレーションができるのは非常に大きい。こういった部分もAOI-PAIRCで実現していこうと考えています。

医療業界の物流でのチャレンジを農業分野に応用することも考えています。近年、医薬品が高額になり、温度管理一つ取っても難しくなっていますが、患者さんの状態が正確にわかり、生産工場とダイレクトにつながれば、物流的な時間のリスクが軽減されます。置き換えれば農作物が出来るタイミングと消費したい人がつながればコストが下がる。ビッグデータといっても一つ一つのディープデータをどう処理するか。暗黙知の可視化とも連なって来るものです。

これまでザクとしたデータだったものを、一つ一つの丁寧な流れ—人間は時間の変化や流れをとらえているのですが、我々はそれに注目し、一つのモノ・コトが情報の世界で一連の流れとして

どうとらえられるかを技術化する。それがデータの利活用だと考えます。これは医療、農業に限らず、人間生活すべてにおいて共通化できるものです。

この先はデータの流通プラットフォームを創り上げていく仕事になります。先ほど来、生活・健康・食というキーワードが出てきましたが、一人一人がプラットフォームで自らの意思でつながっていく。もちろん制限はかけますが、この範囲のデータなら共有し、誰かのために使ってもらってもいい、あるいは自分が使いたいということがきれいに制御された上で、日常生活において生産工程から消費までの一連の流れになる。大量生産大量消費のモデルから、すべて個別化されたモデルへと転換していくのです。

◆青山 旬のレベルや精度も劇的に変わるということですか。

◆矢作 旬というものは大事にしたいと思っています。人間の身体というのは日内変動でホルモンバランスも変化します。実は食習慣も旬に合っていないといけないと思うんですが、科学的なエビデンスがありません。こんなことを言うのは四季折々の食材に恵まれた日本人だけですが、それが長い歴史の中で我々の身体の中に組み込まれたDNAにあるということを研究したい。最近、睡眠について睡眠遺伝子が日内変動をどうコントロールしているかが判明したように、旬をどこまでずらせるのか。たとえばキュウリは年がら年中食べられますが、それが本当に正しいのかを研究してみたいと思います。

### 人が来るから商いが成り立つ

◆青山 山下さん、先ほど商いが来るから人が来るのではなく、人が来るから商いが成り立つというお話がありましたが、この道の駅にはどんなアドバイスをされますか？

◆山下 それが分かれば、私をそこの社長にさせていただきたいと思います(笑)。話が相当ずれると思いますが、先日テレビで日本人が納豆菌を使ってアフリカで井戸を作ったニュースを見ました。アフリカは水のないところですが、井戸を掘って納豆菌の錠剤で余分なものが沈殿し、本当に飲める水になったのです。そこの村が2カ月後、どうなったかという、商店街が出来ていた。要するに水を皆が並んで汲みに来るので、今日はスイカ



がたくさん採れた、魚がたくさん採れたと、各々持ち込んで、それが商店街になった。まさに人がいることで商売が成り立ったのだと実感させられました。

皆さまのお話では、道の駅で実験したいということが印象に残りました。そんな道の駅、聞いたことがありませんので非常に期待しています。皆さん健康というキーワードに非常に敏感ですね。先日富山で歩くイベントに参加したのですが、歩いてイベントに行かなくても日々やっている動作にもかかわらず、歩くだけのイベントに、普段はほとんど歩かない富山の人が400人も集まりました。会場は4階で、普段なら全員待ってでもエレベーターを使う人たちが、「健康」「健康」と呼び合って全員歩いて階段を昇降したのです。

先ほどあった白隠さんの健康について学ぶというテーマは非常にいいですね。静と動が共存しているこの地域らしいプログラムはたくさんありそうだと思います。

若者のUターン問題にも触れられていましたが、私の友人は中学生を対象に、地元をよく知る教育プログラムを行っています。中学生ぐらいになると地元のことを嫌いになる、そこがピンチだしチャンスだと。なるほどと思いました。

富山では大学生をまちづくりに巻き込んで、地元に戻ってくるだけでなく、富山を地元にしてしまった学生もいます。学生さんが年間だいたい30人ぐらいまちづくりに関わり、その中の5~10人ぐらいがIターンする。新潟や長野出身なのに富山に住みたいと、富山の企業に就職するのです。すごい安価な投資ですごいリターンでしょう。10年20年後は彼らがバリバリの世代になりますので、本当に楽しみだなと思います。

## キャスティングが要

◆青山 まちづくりが複合化・総合化していくと、様々な意見も出てくるでしょう。大村さん、地元としてどのような取り組みをされますか？

◆大村 沼津ではかれこれ30年、鉄道高架事業を進めているわけですが、ただ鉄道高架で騒音がすとかこういうものは迷惑施設だというように1点だけをとらえるのではなく、まちの将来を見てほしいですね。だいたい未来を語っている人が皆さん高齢なんです。そうではなく自分たちの子や孫の時代を見据えてやらなければなりません。

今は夢の段階ですが、それを一つ一つみんなで共有し、この地域は必ず将来よくなると言い続ける。それが絶対必要だと思います。難題を一つ一つ解決するのにお金も時間もかかるでしょうが、皆さんが家庭で「この町は将来こんなふうになるぞ」と話し合えるような環境づくりをしていきたいですね。

◆青山 山下さんが最初に広場を作った時、誰もいなくて自分たちで座ったとおっしゃいました。どうやってにぎわいづくりの意識の共有化を進められたのですか。

◆山下 富山はおかげさまで年間300件以上の視察があります。



山下 裕子 氏

県外から来られた方は「市役所で聞いても広場スタッフに聞いても、みな同じ方向を向いている」と褒めてくださいます。そのため

には市長自ら就任後3年ぐらいタウンミーティングを積極的にやって「必ず良くなるんだ」と一生懸命呼びかけ、いわばマインドコントロールをされていたんですね。

私の好きな言葉に「楽観は意思、悲観は気分」というものがあるんですが、非常に意識して口角を上げるようにしています。笑顔でいると人は寄って来て儲けとかそういうことではなく、前向きに関わってくれます。

私はよく「放火魔」と言われるんですが（苦笑）、いつもあちこちで火をつけるのが仕事だと思っています。大事なのはキャスティング。やりたい人、役職ではなくやりたそうな人は必ずいますので、地域内ではしがらみがあって出来ないときは私のようなヨソモノを呼んでいただくことがあります。キャスティングをしてやりたい人の背中を押してあげ、地域の人がしっかり支えれば、その人は地域の中で踊ることができるのです。そういう20~30代の若者を発掘していただきたいと思っています。

## 人生を豊かにするために 時間を投資するために

◆青山 もう一人の放火魔、矢作さん。さまざまな地域の農作物の育て方、熟練技術者のノウハウ等のデータをまちづくりの中で回していくには、ある意味、人間を相手にするコミュニケーションという極めてアナログなものへ変換させることも必要だと思いますが。

◆矢作 最後に難しい質問を投げられましたね（苦笑）。我々がデータをきれいに分析できる環境を作り上げたのは、診療時に問診で書かれた内容がきっかけです。実際、診療の現場で「どうなさいました？」「頭がいたい」といったやりとりですが、15年ぐらい前から言語学的に定量的・定性的な内容、時間的な内容に分解し、0歳から100歳まで起きうる状態を定義化する構造を作りました。

通常データはデジタル化するとフラットになります。デジタルなことはそれ自体フラットで何の意味も持たないのですが、人間の状態、たとえばめっちゃめっちゃ体調が悪かったら外には出ないだろうし、購買にはつながらない。せいぜい薬局か病院に行くくらい。その逆もしかりで、日頃仕事に追われて疲れていても給料日を越えて丸2日間休みが取れたとしたら、どこかに出かけるかもしれない。人間は今の状況状態に応じてあらゆる意思決定するわけです。

この意思決定をつなげていこうと、個人個人のモデルを作りました。これは小児科をやっているよかったのですが、やはり家庭に紐づくのです。なんだかんだ言っても子どもは両親の癖を何かしら受け継いでいる。食習慣もそうですね。食育を見ると子どもに食育をやると家庭の食育レベルは上がります。ところが大人の食育をやって「酒やラーメンを控えてください」といっても隠れて食べに行くわけです（笑）。子どもが前になってくると今まで朝ご飯を食べなかった家庭が100%食べるようになる。

今の状態に適した「旬」に何が最適かわかってくれば、極論を言えば、我々が考えている3秒先が分かれば、献立を考えなくても食材が届くようになります。どこかのスーパーを介さず生産者から直接届く。それが道の駅かもしれないし会社の行き帰りの通り道かもしれない。いい意味で考え

なくても済むわけです。

思考しないというのはよくないと一般的に言われますが、今の世の中、考えるべきことが多すぎます。人生を豊かにすることに考える時間を投入すべきで、そういったところをしくみ化するデータ流通がひとつの血液となれば、金銭的な価値を生み出すかもしれません。今日現在すぐには無理でも東京でなくても新たなサービスを創り出し、農業生産をサポートするITが一体となって、東京では出来ないものを生み出す。交通不便なところでは無理でもここなら可能です。

## 地域マネジメントの視点を

◆青山 西野さん、今回の構想は歴史あり広域交通の拠点あり物流ありスタジアムあり健康あり農業ありと非常に多角的な視点や多様な要素が入っています。こういった複合的な構想を実現させるにはどのようなやり方をすべきでしょうか？

◆西野 鉄道高架化には30数年、静岡空港を取っても非常に長くかかるというのが日本の特徴です。システムを作るのがあまり得意ではないですね。

海外ではエリアマネジメントというのが1970年代にカナダから始まり、80年代にアメリカニューヨークのインダシティの空洞化を防ぎ、2000年代にイギリス・ドイツに広まりました。このような地域マネジメント—私の専門でもありますが、これを日本に取り入れる動きが進んでいます。

静岡県内では静岡新聞社をスポンサードした静岡県中部未来懇話会が地域経営会議を提案し、5市2町の首長、商工会議所会頭、大学学長、NPO、シンクタンクが一堂に集まり、地域課題を抽出し、1年間かけて研究し、研究成果を行政その他に提案しています。これがだんだん実を結び、中部の広域観光で国から多額の補助金をもらいました。今年は健康経営をテーマにしています。このようにステークホルダーが集まって学術的な機能も付加し、政策提言して実行する仕組みは、静岡新聞社さんがあるから出来たことで、地元のマスコミの存在は非常に重要です。本社が静岡にないマスコミとは違うんですね。そうしたものを原・浮島地区でも作ることができないかと思います。沼津市は歴史的に民度の高い地域です。専門家もいれて同時に相互に調整しながら夢に向かっていきたいと思っています。

◆青山 原・浮島地区には静と動、非常に大きな魅力があります。さまざまなインフラ整備も課題で、まちづくりとはきわめて複層的総合的なものです。これを実現可能にするため、絶対に良くなるという意識をもって取り組む。長期的な視点も

必要ですし、すぐに始める・毎日進めることも必要ですし、キャストイングも重要です。子どもたちが帰ってくるまちづくりにしていきたいと思います。本日は長時間ありがとうございました。

### 〈パネラー略歴〉

#### ◇パネリスト

■大村 保二 氏(沼津市商工会会長、大村興業㈱代表取締役会長) 1944年生まれ。67年に明治大学を卒業後、山陽紙器㈱入社。南部工業㈱、フジテック㈱、三友化成工業㈱を経て、86年㈱大村興業を設立。2002年大村興業㈱に組織変更後、16年より現職。

■西野 勝明 氏(静岡県立大学経営情報学部大学院特任教授) 1952年生まれ。75年東北大学法学部卒業後、静岡県庁入庁。通商産業省産業構造課派遣を経て、90年静岡県北米駐在員としてロサンゼルス赴任。2002年政策研究大学院大学博士前期課程卒業(国際開発修士)。同年財団法人静岡総合研究機構 研究部長。08年静岡県立大学大学院経営情報学研究科教授。17年より現職。静岡市をはじめ多くの都市計画審議会会長なども務める。

■矢作 尚久 氏(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 准教授) 1974年米国Palo Alto生まれ。2000年慶應義塾大学医学部卒業、04年同大学院博士課程修了。08年ESDPPP Evaluation of Medical Products in Children修了。

09年東京大学医療経営人材育成講座修了。11年ハーバード大学MHCDプログラム修了。04-07年横浜市立市民病院にて小児科医として勤務後、国立成育医療研究センターで開発薬事・プロジェクト管理部臨床研究ネットワーク推進室室長補佐・情報戦略を担当。その後、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任准教授を経て現職。現在、内閣官房次世代医療 ICT 基盤協議会などの委員も務める。

#### ◇コーディネーター

■青山 茂 氏(㈱シート取締役副社長)

(株)オリエンタルランドを経て、現在(株)シート取締役副社長、(株)スポーツ・ウェルネス総合企画研究所代表取締役社長。静岡県内外の企業および自治体のプロジェクトのコンサルティングから事業プロデュースまで幅広く手がける。ふじのくにしずおか観光振興アドバイザー。サンフロント21懇話会のシンクタンク<TESS>の研究員。



## ラジオマイトーク

【平成29年7月30日放送】

### 三方よしを軸に新たな挑戦

やま なか ひろ とし

## 山中 啓 寿 氏

(株)山中兵右衛門商店  
代表取締役

▽モットー 三方よし  
(売り手よし、買い手よし、世間よし)  
▽趣味 旅行、映画鑑賞、読書  
▽出身地 沼津市

#### 〈お話のポイント〉

◆創業は江戸中期の1718年、来年300年になります。初代が行商で滋賀県を出て、御殿場に店舗を構えたのが始まりです。食料品、調味料、薬、着物、油など生活必需品を扱っていました。現在11代目です。お酒を醸造していたこともあって今は酒問屋が主体です。

♥近江商人の三方よし「売り手よし、買い手よし、世間よし」を経営理念にしています。地域あつての商売ですから地域貢献できる会社を目指しています。

◆伊豆の名産、テングサが原料の寒天を使った「ポテト

チップ酢」は揚げたポテトチップスに寒天をふりかけて酢醤油味にしています。沼津のアジの干物を原料にした混ぜ込みごはんの素も開発しました。地域の特産品と一緒にPRできる商品がいいですね。商売の軸足はいろいろ移っていますが、三方よしを軸に据えながら、新しいことにも常に挑戦していきたい。

◆滋賀県にある山中家の本宅を日野町に寄贈しました。近江日野商人館は歴史民俗資料館になっていて、社会科見学、会社研修に訪れる人も多いです。



## ラジオマイトーク

【平成29年9月24日放送】

### 千年以上の歴史誇る

や た べ も り お

## 矢田部 盛 男 氏

三嶋大社宮司

▽モットー 和  
▽趣味 映画鑑賞  
▽出身地 三島市

#### 〈お話のポイント〉

◆創建の時期は不詳ですが、平安初期には神社組織ができていたことが分かります。「大山祇命(おおやまつみのみこと)」、「積羽八重事代主神(つみはやえことしろぬしのかみ)」の御二柱を総じて三嶋大明神と称しています。矢田部家が代々宮司を務め私で71代になります。

♥20年間伊豆に島流しされた源頼朝公が旗揚げに成功し鎌倉幕府を開いたことで、三嶋大社も伊豆国一宮として全国に知れ渡りました。頼朝の妻、北條政子の奉納と伝わる国宝「梅蒔絵手箱」をはじめ、重要文化財も数多く

あります。梅蒔絵手箱は国立博物館に寄託しています。

◆1万5千坪の境内には国の天然記念物「薄黄木犀」があり、9月上・中旬に満開になり、再び9月下旬から10月上旬にかけて咲きます。甘い香りが境内に漂います。

◆8月の例祭では境内にて手筒花火神事、流鏝馬神事等が行われ、境外では「三嶋大(おお)祭り」と今年から名称を変更して、伝統芸能のしゃぎり、山車の引き回し、頼朝公旗揚げ行列など盛大に行われました。



## ラジオマイトーク

【平成29年11月19日放送】

### 6年前を底に宿泊客30%増

さいとう さかえ  
齊藤 栄氏

熱海市長

▽モットー 真実一路  
▽趣味 テニス、海外旅行  
▽出身地 東京都

#### 〈お話のポイント〉

◆昨年11月にJR熱海駅が全面改修されました。平成23年を底に宿泊客が30%増えています。昭和40年から減少し始め、下げ止まったころの平成18年に市長に就任しました。そこからリーマンショック、東日本大震災とさらに下がりました。

♥就任当時は財政赤字で、何かを行いたくてもお金がない状態でした。熱海にゆかりのある篤志家が梅園の再生に力を貸したいと援助してくれました。梅と桜を5年かけて全面改修し、熱海の特徴である早咲き種を増やしました。

モミジも整備しました。入場料を取ることで毎年整備に投資することも出来るようになりました。

◆職員には誰から給与をもらっているのか、市民のために働くことを常に伝えていきます。意識も随分変わりました。熱海を舞台にドラマ、バラエティの撮影、収録に現場で一番苦労するアシスタント・ディレクターさんの要望に応えるため、「ADさんいらっしゃい」を始めました。

♣運動湯浴施設「マリンスパ」で週1回のアEROビと筋力トレーニングは欠かせません。



## ラジオマイトーク

【平成30年1月21日放送】

### 粉体ハンドリング機器の設計製造

あかほりもと き  
赤堀 肇 紀氏

赤武エンジニアリング(株)  
代表取締役社長

▽モットー 他人(ひと)のために  
▽趣味 ゴルフ、読書  
(池波正太郎の作品が好き)  
▽出身地 菊川市(旧小笠町)

#### 〈お話のポイント〉

◆粉・パウダーの貯蔵、供給、計量、空気輸送など粉体ハンドリング機器の設計製造、販売を行っています。粉体は固体、液体、気体に次ぐ、第4の物質と言われています。

♥粉と言えば、小麦粉、グラニュー糖、化粧品などを思い浮かべると思いますが、我々の周りは粉だらけです。プラスチック、ガラスも原料は粉体です。今注目の車載用リチウムイオン電池も、一万円札の印刷に使うインクも粉です。

◆粉体を設計通りに操ることが出来るかです。計量する

場合も精度を出すのに苦心します。粉体は魔物で、容器に入れると付着し、出てこなくなります。非常に軽い粉、シリカ粉は容器に入れたときはフワフワしていますが、一昼夜放置しますと空気が抜けてコチコチに固くなります。もう一度エアを入れると、水のように流れます。非常に制御しづらいです。

♣業界では経験工学といわれています。やってみて失敗して改善を積み重ねています。失敗が原点です。大変難しい技術が要求されます。

## サンフロント21懇話会の会員情報

### ■新たに入会された方

- ◇(一財)アグリオープンイノベーション機構  
専務理事兼事務局長 岩城 徹雄

### ■会員の変更

- ◇アスルクラロスルガ(株)  
代表取締役副会長 山本 浩義 → 代表取締役社長 渡邊 隆司
- ◇河津町  
町長 相馬 宏行 → 町長 岸 重宏
- ◇松崎町  
町長 齊藤 文彦 → 町長 長嶋 精一

### ■肩書の変更

- ◇(株)佐藤建設 佐藤 宗徳 取締役管理部長 → 取締役副社長
- ◇サンワフーズ(株) 横山 滋 代表取締役専務 → 代表取締役